

大館市文化財調査報告書 第21集

大館城跡発掘調査報告書(2)

2 0 2 5

秋 田 県 大 館 市 教 育 委 員 会

大館市文化財調査報告書 第21集

大館城跡発掘調査報告書(2)

2 0 2 5

秋 田 県 大 館 市 教 育 委 員 会

例 言

1. 本書は、秋田県大館市字三ノ丸に所在する大館城跡（秋田県教育委員会登録番号204-4-46）の発掘調査報告書である。
2. 本書は、大館市教育委員会が刊行する大館市文化財調査報告書第21集である。
3. 調査は秋田県信用保証協会大館支所建設に伴い、大館市が秋田県信用保証協会から受託して実施した。調査主体は大館市教育委員会であり、下記の体制・期間で行った。

(1) 調査体制

教 育 長 高橋 善之
教 育 次 長 成田 浩司
歴史文化課長 関 智仁
歴史文化課長補佐 篠村 朋子
埋蔵文化財係長 滝内 亨（調査担当）
主 査 嶋影 壮憲（調査担当）
同 馬庭 和也
調 査 補 助 員 高橋 光大

(2) 調査期間

現地調査

自：令和6年4月24日

至：令和6年7月2日

整理作業

自：令和6年7月2日

至：令和7年2月28日

4. 本書を作成するにあたり、遺構図等の整理及び挿図の作成は嶋影が行った。また、遺跡周辺地形図、遺構配置図及び各遺構のトレース図の作成は高橋が行った。遺物の実測図の作成は山田勇治、遺物のトレース図の作成は佐々木菜摘、土器片の拓本は整理作業員が行った。野外調査の写真撮影は、嶋影、馬庭、室内での遺物撮影は、株式会社ワールドプラン社に委託した。
5. 本書は、調査補助員、整理作業員の協力を得て、嶋影が執筆、編集した。
6. 本調査で出土した遺物ならびに作成した記録類は、大館市教育委員会が保管する。遺物の注記は「4-46」と出土地点を併記した。
7. 出土遺物のうち、掲載陶磁器については、佐賀県立九州陶磁文化館 大橋康二名誉顧問に鑑定いただいた。記述については嶋影に責任がある。
8. 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の諸機関・諸氏から御協力及び貴重な御教示を賜った。厚く御礼申し上げる（敬称略 五十音順）。

秋田県信用保証協会、M's 設計室、大館市消防署比内分署、大館市消防本部警防課
株式会社芳賀工務店

虻川嘉久、飯村均、五十嵐一治、伊藤武士、宇田川浩一、大橋康二、乙戸崇、上條信彦
河合君近、小山美紀、島田祐悦、高桑登、高橋学、島潟幸男、二階堂里絵、水澤幸一
八重樫忠郎、山本智子

凡 例

1. 本書遺構図等における各基準は、下記のとおりである。なお、その都度スケール、方位、凡例等を示す。

(1) 略記号・縮尺

遺構配置図		1 : 200
竪穴建物跡	S I	1 : 40
柵 跡	S A	1 : 40
井 戸 跡	S E	1 : 40
溝 跡	S D	1 : 40
土 坑	S K	1 : 20
柱穴様ピット	S P	
円形周溝	S Z	1 : 40 (セクション図のみ 1 : 20)
そ の 他	S X	
自然流路	N R	
土層柱状図		1 : 40

(2) 図の方位

真北方向が図面天方向に合致する。例外についてはその都度方位を示す。

(3) 遺構図等の標高

遺構平面図・断面図等の標高値 単位はメートル。

2. 遺物の略記号および実測図・写真の縮尺は、下記のとおりである。

(1) 略記号

名 称	略 号	記 号
土器・陶磁器	P	●
土 製 具	C	
石 製 品 類	S 1 - 5 ~ 8	
金 属 製 品	I	
木 製 品	W	

(2) 縮 尺

陶磁器・石製品実測図・拓影図	1 : 3
金属製品実測図	1 : 2
陶磁器・石製品写真	約 1 : 2 ・ 約 1 : 3
金属製品写真	約 1 : 2

3. 一覧表における遺構の時期の項は、陶磁器からの推定年代である。

4. 本書における遺物の分類基準は、大館市文化財調査報告書第11・15集に準拠する。近世の陶磁器・土器等の器形分類や個体の定義名称は『内藤町遺跡』（新宿区内藤町遺跡調査会編1992）に、瀬戸・美濃焼の器形分類及び時期区分は藤澤良祐氏の編年（藤澤1991・1993）、肥前・肥前系の時期区分は『肥前磁器』（大橋1989）、『九州陶磁の編年』（九州近世陶磁学会2000）に従った。

目 次

例言	i
凡例	ii
目次	iii
挿図目次	iv
表目次	iv
図版目次	iv
第 I 章 遺跡	1
1 調査の経緯	1
2 遺跡の位置と環境	1
3 調査の概要	9
第 II 章 遺構と遺物	15
1 竪穴建物跡	15
2 柵跡	25
3 井戸跡	26
4 溝跡・土坑・その他	26
5 遺物	34
第 III 章 考察	36
1 遺構の構造	36
2 遺物と城の年代	36
3 中世大館城の性格と歴史的背景	37
4 結語	38
引用・参考文献	39
報告書抄録	

挿 図 目 次

第1図	大館城跡位置と大館地方の関係概要図	3	第13図	竪穴建物跡1513と出土遺物	24
第2図	周辺の地形と遺跡分布	7	第14図	柵跡1485	25
第3図	試掘トレンチの位置	10	第15図	井戸跡1450と出土遺物	27
第4図	調査地区と周辺の地形	11	第16図	溝跡1470・1514	28
第5図	土層断面図	14	第17図	土坑1451と出土遺物	29
第6図	遺構配置図	15	第18図	土坑1454・1459・1460 と出土遺物	31
第7図	竪穴建物跡1455(1)	16	第19図	土坑1501	32
第8図	竪穴建物跡1455(2)と出土遺物	17	第20図	円形周溝1469・1515	33
第9図	竪穴建物跡1510	19	第21図	柱穴・柱穴様ピット出土遺物	34
第10図	竪穴建物跡1511と出土遺物	21	第22図	発掘区出土遺物	35
第11図	竪穴建物跡1512(1)	22	別図	明治6年大館町番号列戸絵図	49
第12図	竪穴建物跡1512(2)と出土遺物	23			

表 目 次

第1表	大館市の年間気象	2	第9表	溝跡一覧	42
第2表	大館市周辺の居館	6	第10表	土坑一覧	42
第3表	種別遺構一覧	13	第11表	円形周溝一覧	42
第4表	種別遺物一覧	13	第12表	柱穴・柱穴様ピット一覧	42
第5表	種別土器類一覧	13	第13表	遺構出土遺物一覧	45
第6表	竪穴建物跡一覧	41	第14表	掲載陶磁器・土器観察表	46
第7表	柵跡一覧	42	第15表	掲載土製品・石製品・金属製品・ 木製品一覧	48
第8表	井戸跡一覧	42			

図 版 目 次

図版1	発掘区全景・竪穴建物跡1511	図版6	竪穴建物跡1511・1512
図版2	明治6年秋田県第二大区第一小区大館 町番号列戸絵図	図版7	竪穴建物跡1513・柵跡1485
図版3	城跡遠景・城跡三ノ丸地区近景・発掘 区近景	図版8	井戸跡1450・溝跡1470・溝跡1514・土 坑1451・土坑1454・土坑1459・1460
図版4	大館周辺空中写真	図版9	土坑1501・円形周溝1469・1515・自然 流路1458
図版5	竪穴建物跡1455土層断面・竪穴建物跡 1455完掘・竪穴建物跡1510完掘	図版10	遺構出土遺物
		図版11	発掘区出土遺物

第Ⅰ章 遺 跡

1 調査の経緯

秋田県信用保証協会（事業者）は、秋田県の中小企業が金融機関から融資を受ける際に、「公的な保証人」となることで中小企業の事業の発展や円滑な資金調達を支援することを目的とする公的機関である。事業者は、大館市に所在する秋田県信用保証協会大館支所の建物の老朽化に伴い、隣接する土地を購入し、大館支所の建設計画を立てるに至った。

事業者が設計を依頼したM's 設計室は、令和5年4月20日付け文書での大館市教育委員会（市教委）に建設に関する埋蔵文化財の照会をした。これに対し市教委では、既往の遺跡地図を参考にしたうえ、一部が大館城跡の範囲内に含まれている旨の所見を、令和5年4月26日付け文書でM's 設計室に回答した。

市教委は、当該地にも大館城跡の遺構が存在する可能性があり、土木工事等の際には事前に試掘確認調査が必要であると判断し、事業者に調査の協力を求めた。事業者から確認調査の依頼文書が市教委に提出され、同年6月に確認調査を実施したところ、大館城跡の範囲が今回の建設予定地内に拡がることになり、令和5年7月14日付け文書（5教歴発第43号）でその結果を事業者に通知した。

大館城跡は、近世を主体とする城館で、発掘対象面積はおおよそ300㎡と見込まれていた。この時点では明確に中世の城館とは認識されてはいなかった。

建設が計画された大館支所は鉄骨造りの2階建て建物で基礎が深くまで入る設計であり、遺跡の現状保存は困難であったため、大館城跡の発掘調査が迫られるようになった。事業者側は当初令和5年度内の実施を要望したが、調査を担当する歴史文化課では大館市の本庁舎建設関係と秋田県の農業関係の調査を実施していたため、早急な調査体制を組むことが難しかったことから、6年度に送ることにした。発掘調査は事業者の費用負担を受けて実施となった。これについては令和5年10月の会議で双方合意し、5年度末までに確定した。大館城跡の調査はゴールデンウィーク明け頃に開始し、期間は2ヵ月と考えた。

6年度にはいり、大館城跡の調査の開始は4月下旬と決定した。市教委は6教歴発第17号で文化財保護法第99条の発掘通知を秋田県教育委員会に提出し、作業員任用などの調査準備を行った。

なお、大館城跡は、平成28年より継続的に発掘調査を実施し、8年次目の調査にあたり、第9次の調査になる。

2 遺跡の位置と環境

(1) 位置と地理的環境

大館城跡は大館市字三ノ丸87番1他に所在する。大館市は秋田県の北東部に展開する大館盆地を中心に、その周辺の丘陵・山地を市域とする。大館盆地は西側の日本海に向かって尖る三角形の平面形を呈し、大局的な地勢は東から西に傾斜する。城跡は巨視的にみてこの盆地内に東西方向にのびる広大な大館段丘北縁、標高約70mに立地する。

城跡からは、北西から北東方向にかけて白神山地につらなる盆地北部の山々を望み、眼下には盆地北部を一望のもとに見下ろす。東西両側も山地である。南西側は摩当山（444m）、焼山（309m）か

らつらなる丘陵が形成され、東側は奥羽国境となる出羽山地から派生する山地が望まれる。これらの山地に囲まれて展開するのが、大館盆地である。秋田県北部第一の河川である米代川は、奥羽山脈の東側から流れ、岩手県との県境を越え、奥羽山脈を深くえぐり、鹿角盆地を抜け、大館盆地に達する。青森県中央部と秋田県中央部を結ぶ大動脈、国道 7 号線と J R 奥羽本線はこの米代川に沿って、ほぼ東西に通っている。一方、大館盆地北東側に源をもつ長木川は、盆地内をほぼ東西方向に流れ、城跡北側をぬけ、盆地西部で米代川に合流する。

城跡周辺の地形は、①山地および丘陵、②台地、③氾濫原性低地に分類される（第 2 図）。前述したように、巨視的には城跡の周囲には山地・丘陵が分布し、その内側に台地・段丘地が半島状ないし島嶼状に散在する。山地・丘陵のうち、その北端に鬼ヶ城をのせる鳳凰山（520m）とその北側の鍋越山（402m）は、長木川によって、分断される。台地は十和田火山の火砕流堆積物で形成され、北東および南東から西方向の地勢に平行して下内川・大森川・犀川などの谷がある。当城跡はこの火砕流台地に立地する。

氾濫原性低地は、おおよそ標高 80m 以下に分布し、大館盆地の主体をなすものである。低地は長木川と米代川が盆地内を流れるところに広く分布するが、台地との境界に明瞭な段差をもち、段丘状となる部分がある。こうした地形は河川が台地を開析したことにより形成されたと考えられ、城跡は長木川南岸の段丘化した火砕流台地縁辺に立地している。

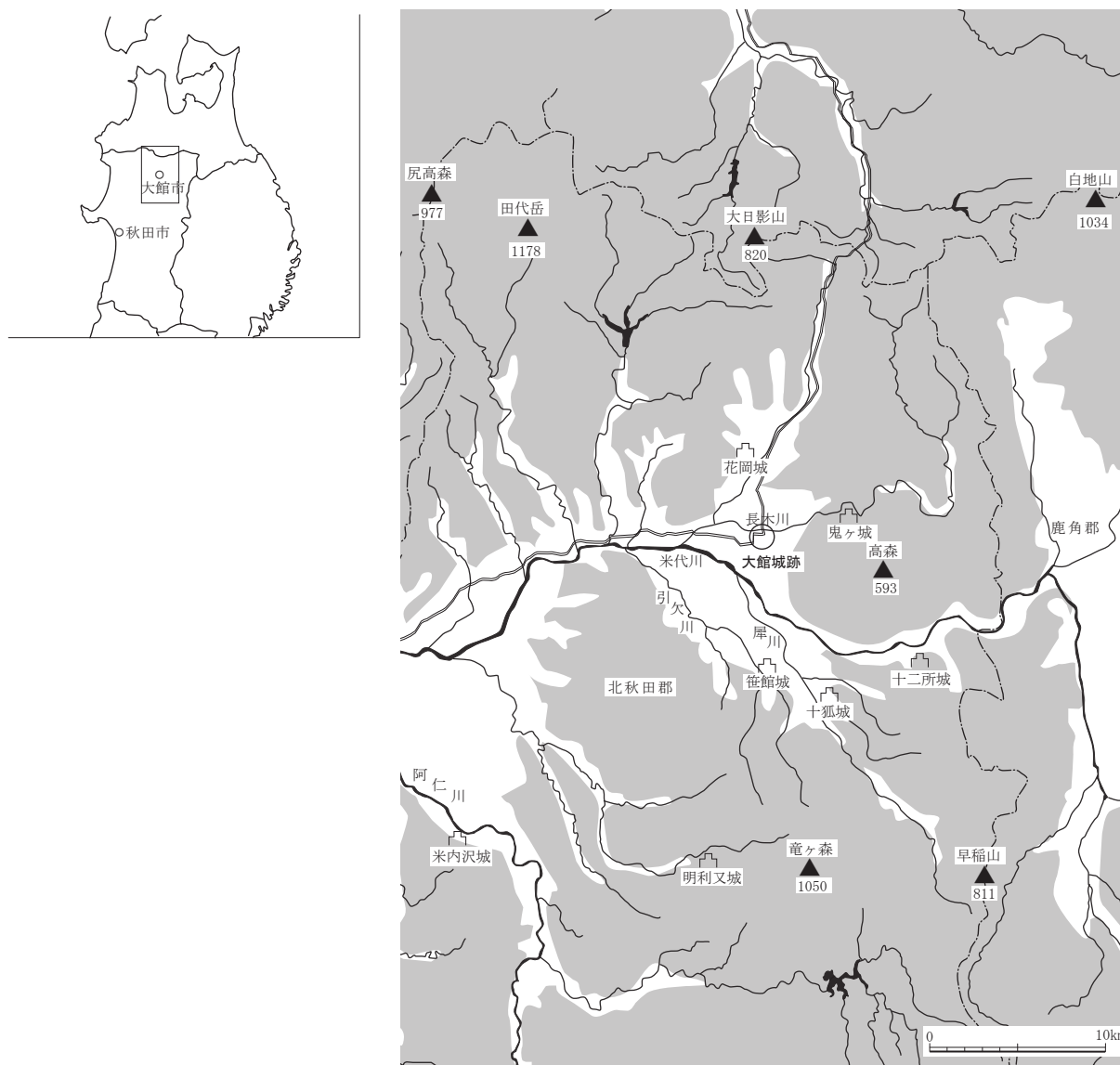
長木川と米代川にはさまれた地域は、現在大館市街地の中心部となっている。これは旧大館町の町域を継承するものであるが、地形的にまとまった地域を形成している。この地区は地形的にみて、浸食谷をのぞくとほぼ台地と低地に区分される。台地は段丘面、低地は沖積面と区分することもできよう。この地区の台地は東台から柄沢を経て餅田・片山の集落に至る三角形の平面形を呈し、その東西は山地と米代川・長木川にそれぞれはさまれている。最高点となる東台は標高約 80m に立地し、末端の餅田は標高約 50m である。長木川と米代川に沿う北側と南側は、両河川の氾濫原である沖積面との段差が発達する。この段差は上流ほど大きく明瞭である。今回の調査地点はかつて長木川の支流として流れていた小川の通称「オボコ沢」の右岸、長木川にむかってわずかに半島状に突出する地点に立地し、段丘崖の比高は約 10m である。一方、段丘の南側は段丘から米代川へ流れる川に沿って、段丘面より低い帯状の浸食谷が形成される。

気象条件 大館市の年間の気象状況は第 1 表のとおりである。これは過去 30 年間（積雪は 25 年間）の数値の平均値である。降水量は夏が多く、冬は少ない。朝晩の寒暖の差が激しく、内陸性気候の特徴をもつ。年最大積雪深は平均 60cm、最大は大正 12 年豪雪の 255cm である。平均すると、12 月中旬には根雪となり、3 月中旬までこれが残る。気温は冬季－3℃前後であり、真冬日となることが多い。夏季は 22～24℃である。夏の日中は暑くなるが、やませの影響を受け、冷夏となることがある。

第 1 表 大館市の年間気象

	1 月	2 月	3 月	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月
平均気温(℃)	-2.0	-1.4	2.0	8.2	14.4	18.8	22.5	23.6	19.0	12.0	5.7	0.2
平均降水量(mm)	108.2	92.6	106.1	118.5	126.4	121.6	216.6	214.0	164.8	163.2	162.0	139.2
平均最大積雪値 (cm)	55.5	61.4	36.4	0.6	—	—	—	—	—	—	4.6	28.8
根雪日数	80 日 最大積雪値及び起年月日 255cm（大正 12 年 3 月 4 日）											

積雪(大館市消防署観測)
気温・降水量(気象庁観測)



第1図 大館城跡位置と大館地方の関係概要図

(2) 古代の歴史的環境

本遺跡周辺の奈良・平安時代のおもな遺跡の分布は第2図のとおりである。これはおもに『平成17年度秋田県遺跡地図（北秋田地区版）』（秋田県教育委員会2006）をもとに示したものである。

奈良・平安期より古い時期のものでは、弥生後期の釈迦池遺跡や柏木遺跡、片山館コ遺跡・川口十三森遺跡などの続縄文遺跡が知られている。柏木遺跡は縄文中～後期の集落跡を主体とするが、弥生後期の土坑墓が発見されている（奥山1971）。大館盆地の続縄文遺跡はおもに盆地の北部に点在している。片山館コ遺跡は大館市史編さん事業に伴って調査され（奥山・板橋1973・1974）、川口十三森遺跡は市道工事で一部調査されている（大館市教育委員会郷土博物館編2014）。これらの遺跡は弥生時代後期末から古墳時代前期のこの周辺の居住域と考えられているが、集落の所在は、現状では地域的に特定できず、よくわかっていない。

奈良期の遺跡は川口十三森遺跡以外知られてはいない。川口十三森遺跡は内面黒色土器、ガラス玉などが出土しており（大館市教育委員会郷土博物館編2014）、蝦夷の集落と考えられる。川口地区で

は下川沿遺跡から勾玉や朱彩土玉が出土したといい、末期古墳の存在を示唆している。この周辺が大館盆地の拠点だったことがうかがえる。

平安前期の遺跡は皆無で、平安中期（9世紀後半～10世紀）のうち、とくに元慶の乱以降の9世紀末以降の遺跡が数多く確認されている（宇田川2005）。道路や学校の建設に伴い発掘調査された遺跡が多く、盆地東部では塚ノ下遺跡（秋田県教育委員会1979）や諏訪台遺跡（秋田県埋蔵文化財センター編1990）、大館段丘では段丘南側の餌釣館跡（山王台遺跡・山王岱遺跡）（大館市教育委員会1990b、秋田県埋蔵文化財センター編1992）・扇田道下遺跡（大館郷土博物館編2013）・池内遺跡（秋田県埋蔵文化財センター編1997）、盆地北部では秋田自動車道建設に伴い、釈迦内中台Ⅰ遺跡（秋田県埋蔵文化財センター編2008a）・狼穴Ⅱ遺跡（秋田県埋蔵文化財センター編2010）・狼穴Ⅲ遺跡（秋田県埋蔵文化財センター編2008b）・狼穴Ⅳ遺跡（秋田県埋蔵文化財センター編2005）・坂下Ⅱ遺跡（秋田県埋蔵文化財センター編2009）などで集落跡が発見されている。当地域では西暦915年頃に噴火したとされる十和田火山の降下軽石層（T o - a）が竪穴建物跡から検出される遺跡がある。この有無から、火山噴火前には、前述の遺跡のうち、大館段丘南側で小規模な集落が形成され、噴火後も継続して集落が営まれたことがわかっている。また、噴火後の10世紀前葉に新たに盆地周縁部に進出し、前述の釈迦内地区では百軒を超える竪穴建物跡が発掘調査され、製鉄を生業とした集落が現れる。しかし、これらの集落は10世紀には廃絶し、11世紀までは継続しないと考えられる。

平安後期の遺跡は土飛山館跡がある。10世紀後半以降に成立し、11世紀まで継続して営まれていたことがわかっている（秋田県埋蔵文化財センター編2007、大館郷土博物館編2009）。集落の後半期には大溝で区画される竪穴建物からなる集落で、いわゆる「防御性集落」の一種と考えられる。しかし、土飛山館跡以外の遺跡はほとんど知られていないため、古代から平安末期・中世まで継続的に営まれる遺跡は少ないと予測される。いずれにしろ、古代を通じて開発が進んでいたのは地形区分上の台地を中心とした段丘面とみることができる。

(3) 中世の歴史的環境

1) 中世後期の比内の動向

文治5年（1189）、平泉政権が滅亡すると、比内は浅利義遠にあたえられたという。元弘3年（1333）、鎌倉幕府が滅亡すると、建武2年（1335）に北畠顕家が鎮守府将軍に任命された。その後、足利尊氏が自立し、顕家が尊氏征討のため上京すると、その留守を預かる南部師行と曾我貞光との間に激しい戦闘が始まった。浅利氏は曾我氏に加わり、比内は抗争の場となったが、浅利氏は以後も比内を支配した。浅利氏が勢力をのぼし、比内を掌握していくのが16世紀初頭から前葉にかけての永正年間、浅利則頼の代である。そして次の勝頼の時代を迎える。勝頼は永禄5年（1562）に兄則祐を自害に追い込み、家督をつぎ、十狐城に入城した。浅利勝頼は安東愛季に従って鹿角地方に勢力をのぼしたが、愛季と対立し、天正10年（1582）に没した¹⁾。

勝頼の死後、その子の頼平は大浦為信のもとに身を寄せた。愛季と頼平の間に領地奪回の争いが生じた。これが天正12年から3回にわたって行われた。天正15年（1587）愛季が死ぬと、その子実季と実季の伯父の豊島道季の間に争いが生じ、内乱に発展した。天正17年の湊合戦である。同年に南部信直が比内に侵入、秋田氏と南部氏の間で比内は再び抗争の場となり、天正17年から2年間にわたって続けられた。今度は南部氏の中で一族争いが生じ、天正18年（1590）に秋田氏は、比内を取り戻した。このとき頼平は為信のあっせんによって比内にかえった。頼平には秋田氏の一家臣として、秋田

郡のうち所領7000石といわれる。実季は慶長7年（1602）に常陸国宍戸に移封され、佐竹義宣が入部し、まさに新しい時代を迎えることになる。

以上が中世後期の比内のおおよその動きである。この間、全国的に戦乱が続くが、比内においても、数多くの戦乱の連続である。南北朝の争乱（1335）、浅利則祐と安東愛季の戦い（1562）、浅利勝頼と安東愛季の戦い（1581）、浅利頼平と安東愛季の抗争（1584～87）、秋田氏と南部氏の抗争（1589～1590）、あるいは実季と頼平の抗争など枚挙にいとまがない。こうした戦乱に伴って数多くの城館が築かれたことはいうまでもない。しかし、これらの城館の築城年代は文献資料からはほとんど知りえない。比内の城館の中心ともいべき十狐城は、浅利則頼によって築かれ、則頼の時代に充実したとされる。則頼は一族と家臣団を形成し比内を支配したとされることから、いくつかの城館がこれと直接的な関係で成立したとするならば、16世紀代にその築造年代の中心をおくことができる。

ところで、当時の大館市周辺を知る文献資料はごく少なく、具体的な動向はほとんどわからない。文和3年（1354）の「沙弥浄光譲状」（新渡戸文書）にみえる「重内郷」は市内大茂内に、「有平郷」は市内有浦に比定されている（板橋2004）。天正19年（1591）の秋田家文書に「大館」の名があらわれる程度である。城館については、「浅利与一侍分限帳」から市内にある城館の主がある程度比定されている（板橋・田山1979）。とはいっても、大館城に関する記録はほとんどなく、大館城の造営にかかわるさまざまな歴史的背景は文献資料以外の多様な観点から考察することが要請される²⁾。

2) 中世の遺跡

城館跡をのぞく中世の遺跡は、さほど多くは知られていない。大館市内で調査がなされているのは矢立廃寺跡（大館市教育委員会1987）と玉林寺跡（大館市教育委員会1986）など数えるほどにすぎない。

矢立廃寺跡は現在の集落に近いところに存在している。矢立廃寺跡は出土遺物からみて12世紀を中心とする時期と考えられ、掘立柱建物跡・礎石建物跡・井戸・便所などが検出された。遺構は南北方向と東西方向の溝に囲まれた部分に分布している。玉林寺跡は林道を整備の際、発掘調査したところ、土坑が検出されたもので、時期は中世（後期）と考えられる。以上のように、中世の遺跡についての知見はきわめて乏しく、今後の調査の進展がまつれる。

3) 城 館

大館盆地には浅利則頼の居城として知られる十狐城をはじめ、数多くの城館跡が分布する。大館市周辺の城館跡については『大館市史 第1巻』（板橋ほか1979）、『秋田県の中世城館』（秋田県教育委員会1981）の調査・研究がある。以下、これらによって概観しよう。

まず、城のうち大規模なものには、十狐城・花岡城・十二所城がある。十狐城は前述のとおり文献にみえ、浅利則頼が居住していた。標高100～110mの台地に壮大な堀切りがあり、4つの郭を形成する。大館城から十狐城は望めない。

花岡城は大森山からのびる台地先端、標高78mにあり、山田越えをおさえる位置にある。大館城からも見える。壮大な空堀がうかがえ、1本の堀切で台地を断ち切るもので、十狐城と相前後して築城されたとされる。主郭部には秋田県立大館工業高等学校が建設され旧態をとどめていない。なお、城の東南台地に女目館といわれる館がある。

十二所城は浅利氏の家臣である十二所氏の居城といわれる。十二所城については詳細な記録は残されていないが、「浅利与一侍分限帳」によると、鹿角郡扱人として十二所信濃が記され、ほかに4人の役人が任命されていたという。

このほかの城はおおむね小規模である。大館城跡の東側山地には鬼ヶ城（大館市教育委員会

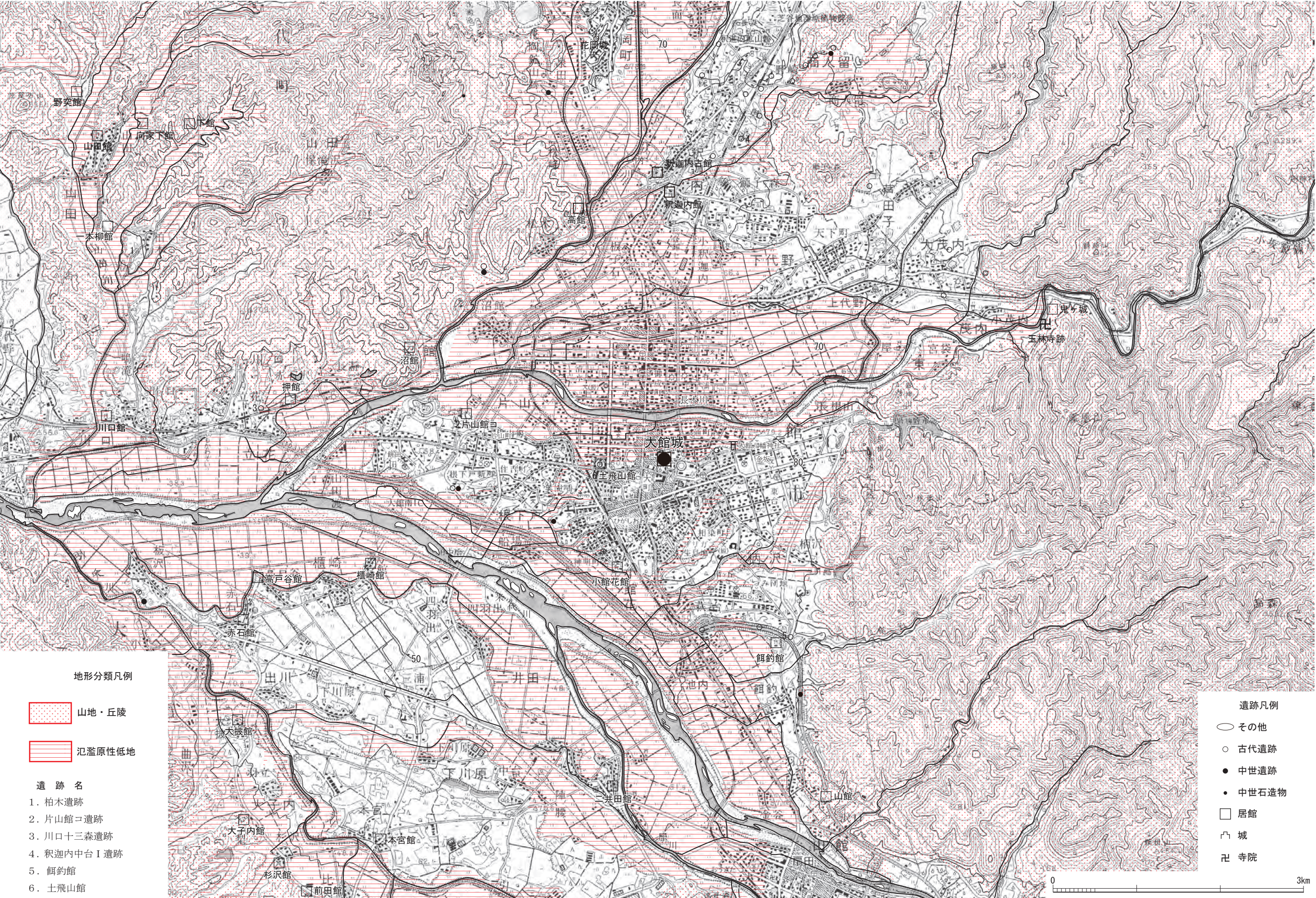
第2表 大館市周辺の居館

名 称	所 在 地	遺 構	関係地名	備 考
花岡城 しゃかないふるだて 釈迦内古館	大館市花岡町字アセ石 〃 釈迦内字釈迦内	旧花岡川の河岸段丘、空堀 河岸段丘端、宅地となり、旧 規模不明		浅利定頼、次郎吉館跡と伝う
釈迦内館	〃 釈迦内字館	河岸段丘端、空堀	母衣飾りの御所	浅利家の女性の居館と伝う
高館	〃 松木字高館平			工藤信久館跡と伝う
沼館	〃 沼館字細越			
押館	〃 川口字十三森	河岸段丘上		
川口館	〃 川口字長里	空堀		佐藤兵助館跡と伝う
片山館コ	〃 片山字立杭上岱	舌状台地、土塁、空堀、掘立 柱建物、竪穴建物		城跡と伝う 片山弥伝治の居館か
とびやまだて 土飛山館	〃 豊町	台地、土塁、空堀、国道・住 宅建築のため一部消滅	土飛山	
大館城	〃 字中城・三ノ丸・ 桂城・長倉・片町 ・上町	堀、竪穴建物、カマド状遺構		浅利勝頼が築くと伝う
鬼ヶ城	〃 茂内字鬼ヶ台			
小館花館	〃 小館花、字小館花	台地	古館	小立塙兵部館跡と伝う
えつりだて 餌釣館	〃 餌釣字山王岱	空堀、土塁、掘立柱建物、火 葬墓	堀越、屋敷、館	生内権助館跡か
山館	〃 山館字館ノ上			山館刑部館跡と伝う
二井田館	〃 二井田字館	空堀、井戸、掘立柱建物、カ マド状遺構	贅の里	河田次郎居館と伝う 川口安芸館跡か
本宮館	〃 本宮字熊ノ下		館下、家ノ下	本宮弥九郎
前田館	〃 比内前田字前田山根	空堀、掘立柱建物		前田清左衛門館跡と伝う
杉沢館	〃 杉沢字姥沢出口		屋布、古屋布	武田興左門豊信、四郎 太豊俊、杉沢数馬
おおしなだて 大子内館	〃 大子内字三ツ梨	土砂採取のため大部分が湮滅	家の間	大子内三十郎
おおびらき 大披館	〃 大披字家ノ前			武田太郎作、弥藏掃部助
ひつぎき 櫃崎館	〃 櫃崎字館宅地		館	
高戸谷館	〃 赤石字上坂上	河岸段丘端、空堀		
赤石館	〃 赤石字屋敷			
下館	〃 山田字下館務沢			
野突館	〃 山田字野月		茶臼館	野突助三郎、野突助右衛門
山田館	〃 山田字山田			蟹沢庄兵衛
向家下館	〃 山田字向家下			
一本柳館	〃 山田字一本柳			

(拠：秋田県教育委員会1981、大館市教育委員会1990a、第2図の図幅のものに限る)

1986) がある。鬼ヶ城は平地と20m以上の比高差をもつ。

一方、居館は『秋田県の中世城館』によるといくつかあげられている(第2表)。これらのうち、大館市中心部のものについて第2図に示した。第2表に掲げたものは遺構が確認されたもの(秋田県教育委員会1981)であろうが、大館市内のもので、現在も堀や土塁を明確に残しているのは餌釣館であるが、館主は不明である。餌釣館は米代川の曲流袂の崖を利用したもので、半島状の基部を堀切り郭とする。



第2図 周辺の地形と遺跡分布

また、現在は、埋められて分かりにくくなったが、近代まで土塁や空堀を残していたのが片山館コである。片山館コは長木川左岸の比高9mの半島状の台地に立地し、半島状の基部を堀と土塁で区画し、東西40m、南北160mの広さをもつ。これらのほかにも館跡が多数存在する。

ところで、大館城跡を含めて、立地条件にひとつの共通点がみられる。すなわち、おおむね河川に面した河岸段丘縁辺に立地し、眺望もよいことである。米代川には餌釣館・小館花館・山館が、長木川には大館城・土飛山館・片山館コ・押館がそれぞれ臨んでおり、周辺に対する眺望もよい。松木高館は字「高館」によって存在が推定されたものであるが、下内川に面した山地に立地し、眺望もよいことは共通している。このような立地条件は、これらの館の性格や造営の背景、時期などについて示唆的である。なお、館の時期について、餌釣館・片山館コ・土飛山館・前田館は中世前半に成立することが、発掘調査で判明している（秋田県埋蔵文化財センター編1992、奥山・板橋1973、大館市教育委員会2020、櫻田・利部1997）。

4) 村落と交通

村落 中世に存在した集落は浅利頼平が長束正家に提出した「比内千町と申習候村数之覚」によって、おおよその状況を知ることができよう。文書に書かれた村はおおむね現在の村と対応する。村が多く分布しているのは、大館の市街地より南側あるいは南西側の地域であり、地形区分の上では段丘面である。館跡の分布状況も村の分布と重複する面がうかがわれる。

交通 比内地方は近世大館城の所在地であり、秋田地方と津軽・南部地方を結ぶ結節点にあたる。こうした交通上の特性はどの時代についてもかわることはない。また、大館市周辺の北辺は津軽に近く、これと交通上の接点である。

中世の交通路は詳細がよくわからないが、奥大道や天下道などが記録にみえることからすれば、近世の羽州街道（ほぼ現在の国道7号線）にあたる道が存在したと思われる（第1図）。一方、大館から南部の鹿角に至る鹿角街道（現在の県道比内田代線など）にあたる道も存在したと考えられる。鹿角地方と比内地方の分水嶺にはいくつかの峠があり、南西側には北秋田に至る峠もあり、上記以外にも多くの道が通じていたことがうかがえ、これらによって両地方との活発な交流がなされていたものと思われる。

なお、近世の歴史的環境については、『大館城跡発掘調査報告書』（大館市教育委員会2019）に詳述されており、そちらを参照されたい。

3 調査の概要

(1) 調査地の現況（第4図）

当城は長木川左岸の河岸段丘縁辺、標高約70mに立地する。今回の調査地が立地する地点は段丘縁辺のなかでも北西側に張り出しており、小さな半島状をなす。長木川との比高差は約13mである。城跡からの眺望はよく、北側直下に長木川が流れ、大館市街を一望し、遠くは津軽国境の山々が視野に入る。北側には独鈷町、通町の集落を眼前にひかえる。

城の北側、市勤労青少年ホームや市保健センター以北は、開発がなされておらず、旧地形をよくとどめている。調査地点は東側がやや高く西側に若干傾斜し、宅地となり、その西側は民間の駐車場である。半島状の西縁の部分は南東から北西方向に約180mあり、その南西辺は駐車場の面と1mほどの段差がある。今回の調査の結果、この宅地からなる高い部分と駐車場との段差に沿って河川跡が検

出されたが、今回の調査地は盛土整地されており、調査前にその痕跡は認められなかった。こうした点からも、調査前に城の存在を明確に確認するに至らなかった。また、この周辺は遺物の散布が希薄で、再三の表面採集でも遺物は発見されなかった。

(2) 調査の方法と経過

1) 発掘区の設定 (第4図)

平成26年度に設けたXY直交座標系の発掘区を利用し調査を実施した。座標系Y軸は、真北方向と平行に、X軸はそれと直交するように設定している。座標の原点(A-0)は、遺跡の南東方向にある。基本区画は10×10mで、記録上、基本区画を5m毎に4分割した小発掘区を設け、反時計回りにa～dとした。発掘区の呼称は東西をアルファベット、南北を数字として、両者の組み合わせによって、南東隅の杭の座標で表示され、本調査地区は、Y=AM～AP、X=22～23にあたる(第4図)。なお、主な座標点の公共座標は第4図に示すとおりである。

2) 試掘・確認調査

本調査に先立って、遺跡の層序や遺物の包含状況をおおよそ把握するために、令和5年6月中旬の4日間に試掘・確認調査を実施した。調査は発掘区の軸に合わせて幅1mの試掘トレンチ(Tr)を設定することを基本として、断面観察と遺構検出を行った。最終的には4本の試掘トレンチをあけた(第3図)。

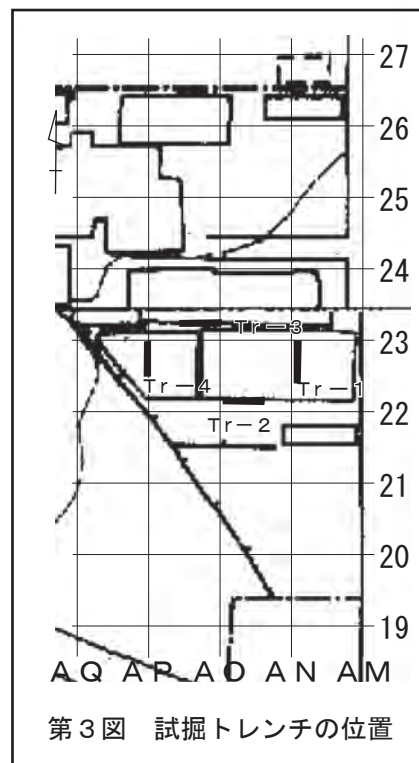
その結果、褐色のいわゆる地山(火砕流堆積土)上面までの深度は50～110cmであり、基本層序は表土(盛土)とその下の黒色土であることが確認された。Tr-1・3では地山面で土坑・溝・井戸・柱穴様ピットが検出された。出土した遺物は近世磁器21点、陶器4点であった。これらは細片で、時期は明確ではなかったが、一応近世のものと推定した。

以上の試掘・確認調査の結果、遺構の分布は宅地部に拡がり、発掘面積は約300㎡が調査対象となった。しかし、遺物の出土量がごく少ないこともあって、この時点では中世の居館という性格は明確に意識していなかった。

3) 調査の方法

調査はまず旧表土(I層)及び盛土を重機によって除去し、黒色土(以下II層)を人力によって掘り下げた後、地山(以下IV層)上面で遺構を検出した。遺構確認では、掘立柱建物の見落としのないよう柱穴の関連に注意した。建物柱穴は柱痕の検出に重点を置き、断面観察は代表的なもの以外行わなかった。井戸・土坑は半截した時点で断面観察をし、掘り下げた。遺構平面図の測量図の作成にあたっては、トータルステーションシステムを使用して位置情報を取得し、実測図を作成した。

遺構番号は、建物・井戸・溝等の種別で分けず、検出順に一連番号を付し、その頭にSI・SE・SD・SK・SA・SP・SZの種別記号を付した。I・II層の遺物は発掘区および小発掘区単位で、遺構の遺物はそれ毎に取り上げ、それぞれ「4-46・AN-22・II」・「4-46・SE1450」のごとくラベルを付けた。遺物の注記は、調査時のラベルを生かし「4-46・AN-22・II」・「4-46・SE1450下層」のごとく行った。土層観察は、南北方向は調査区東壁、東西方向は調査区北壁で行った。





第4図 調査地区と周辺の地形（1：2,500）

4) 調査経過

調査区内に排土置き場を確保できなかったため、調査は東西半分に分けて実施することとなった。4月24～25日に表土掘削。5月1日に器材を搬入し、準備作業を完了し、2日より発掘作業に着手した。

発掘は調査区西端より開始し、調査区東側の敷地内に排土した。当初、Ⅱ層の掘り下げにおける遺物の出土は、全般に希薄であり、Ⅲ層上面までの掘り下げは早く進行した。発掘開始まもなくの9日に令和5年度の試掘・確認調査Tr-3を再度掘削したところ、井戸の南側に長さ約3m、深さ約50cmの竪穴建物（竪穴建物1455）であることが判明し、居館ではないかとの見通しがもたれた。その後15日にTr-3で検出されていた井戸は竪穴建物より古い時期に構築されたことが判明し、竪穴建物から瀬戸・美濃焼が1点出土し、この時点で当調査区が中世の居館であるとの確信をもった。柱穴はいくつか検出されていたが、21日にAO-22区で2間の柵（1485）が確認された。

重複する柱穴は少なかった。また柱痕の確認は容易ではなく、柱穴確認面から10～20cm下げた時点でそれを確認しようと試みたが、柱穴埋土が黒色土を主体としていたため、地山土の混入の度合・土のしまり具合等、不確実な根拠で確認せざるを得なかった。

調査開始後1週間ほど経過し、当地の地層にも慣れ、遺構の掘り込み面を観察したところ、Ⅱ層内から遺構が掘り込まれていることを確認した。したがって、Ⅱ層上面で遺構を検出することは困難であり、もし可能であったとしても著しく時間を要するうえ不確実であると判断し、Ⅲ層上面まで下げて遺構検出することにした。

この頃、溝が円形に巡ることを確認し、円形周溝となれば市内では初めての発見例となる。

29日には大館市消防本部の協力を得て、ドローン撮影で西側半分の全体を写真撮影した。6月1日に西側半分の調査を終了し、予定より1日遅れで3日から東側の表土掘削に入った。調査区西側では中世の竪穴建物跡とそれ以前の円形周溝が確認されたため、主体部が残されている可能性も考慮しⅡ層以下を残し、人力によって掘り下げることにした。しかし、調査地は昭和期には個人病院敷地であったため、その基礎の玉石が多く入っていた。そのため、予想以上の人力と時間を費やすことになった。また、東側調査区では予想以上に遺構が多く分布しており、竪穴建物跡が4軒検出された。このため、作業工程に遅れが生じ、19日以降調査職員を1名（馬庭主査）増員し柱穴の調査を進めた。

27日には再び大館市消防本部に協力いただき、ドローン撮影で東側半分の全体を写真撮影した。28日に器材搬出を行い、7月1・2日に残っていた平断面実測図の作成を完了し、本調査を終了した。

なお、7月15日に建物西隣の外構工事の立会調査を行ったが、沢跡だったため遺構・遺物は確認されなかった。

当城跡の発掘は、調査中から注目を集めた。城跡は調査後、破壊されることでもあり、多くの市民に検出された館や出土遺物などを見てもらうために、6月29日に現地説明会を開催した。当日は厳しい暑さの中、大館市を中心として約70名の参加者があり、あらためて文化財に対する関心の強さを認識した。

(3) 層序

今回発掘調査を行った範囲は、河岸段丘上縁辺部の東西約23m、南北約13mの範囲であり、東側は高く、西側は河川跡で低い。地勢は西に向かってゆるやかに傾斜する。

土層は単純である。令和5年度に実施した試掘・確認調査時の断面の観察から、調査区内の土層を

次のように区分した。

I 層 昭和期の旧表土。調査区内では本層上部に宅地造成時の盛土が認められる。I 層はII層が耕作等により変質したもので、II層と基本的に同一層と考えられる。このことから城が存在した時の地表は現状とほぼ同じレベルであったと推定される。I 層は厚さ10～40cm程である。黒色を呈し、粘性があり、締まりはよい。

II 層 黒色を呈する腐植土層で、本来の遺物包含層である。本層は色調などからさらに2層に大別される。なお、本層内には調査区南西部に一部十和田火山噴火軽石層（T o - a）と推測される層が確認されている。

II a層 黒色（10Y R2/1）の色調を呈する腐植土層である。厚さ14～18cm程ある。

II b層 黒色（10Y R1.7/1）の色調の土層である。厚さ4～20cm程である。

III 層 漸移層。暗褐色（10Y R3/3）を呈する。

IV 層 褐色（10Y R4/4）。いわゆる地山で、十和田八戸火砕流の二次堆積物である。固い。0.5～6 cm大の礫を多く含んでいる。

（4）調査結果の概要

今回の調査範囲は、段丘崖に面した城の西端部にあたる。近世の堀に囲まれた城の規模は東西600 m、南北200～300m、面積約15,000㎡と推定される。発掘面積は約300㎡である。

当該地区は、令和5年度に実施した試掘・確認調査の結果、かつて建てられていた病院の基礎により大きく攪乱を受けている箇所があるものの、中世から近世の遺構や遺物が分布することが確認された。

検出された遺構は竪穴建物跡・柵跡・井戸跡・円形周溝などである。竪穴建物跡は全体で5軒検出された。建物の方向は角が東西南北を向き、建物方位が河川跡の方位に近い。井戸は1基検出された。素掘りで、径1.6mを測り、円形を呈する。現在は湧水はない。遺物は212点が検出された。

各遺構や遺物についてはII章で詳述するが、これらの遺構、遺物は中世を主に、古代、江戸時代に属するものである。

註

1）天正11年（1583）に檜山城で殺害されたという説もある（「湊文書」「松前家譜」「新羅の記録」（板橋・田山1979）。

2）本項の記述については塩谷順耳1962、板橋範芳・田山久1979、板橋範芳2004を参考にした。

第3表 種別遺構一覧

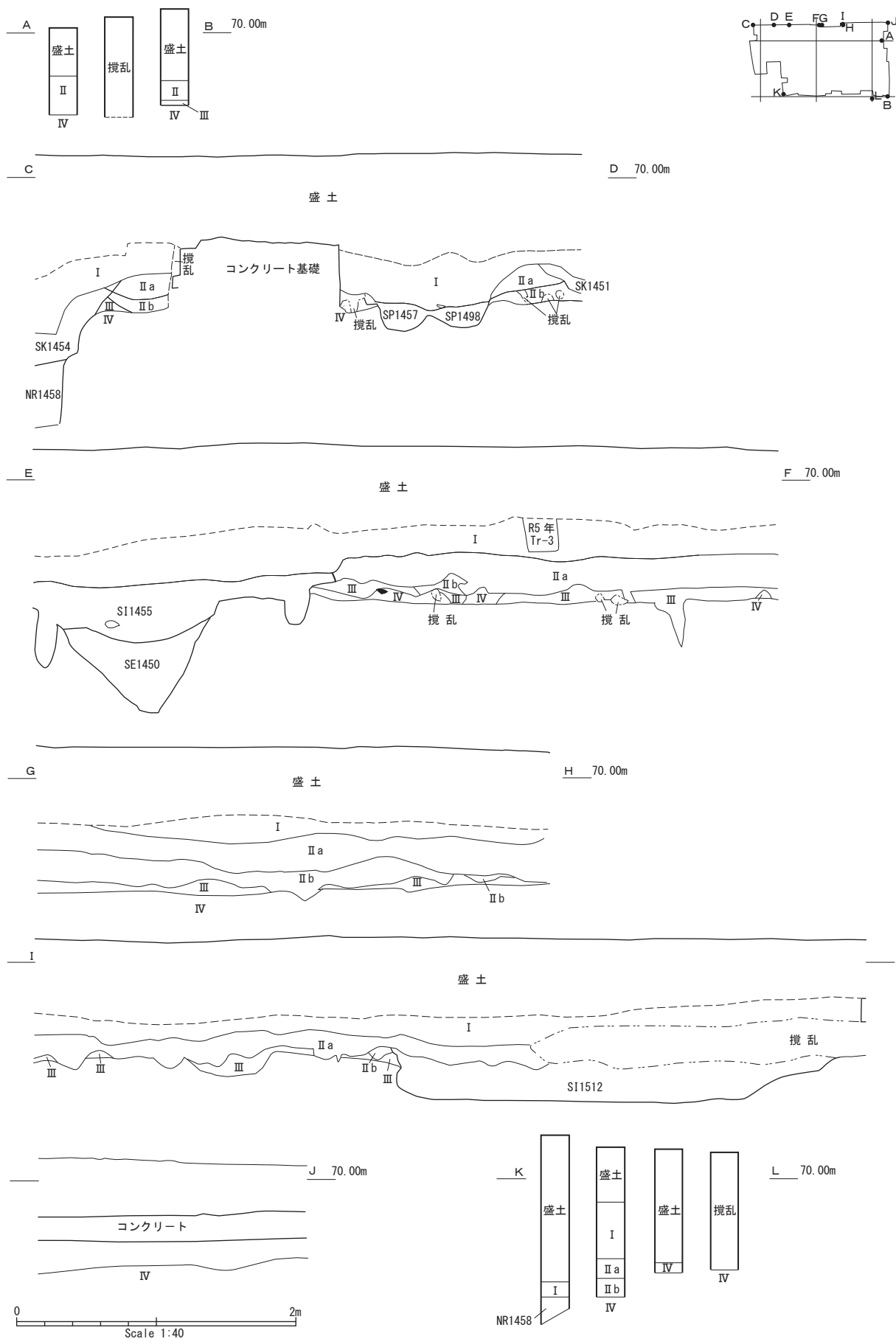
竪穴建物跡	柵跡	土坑	井戸跡	溝跡	円形周溝	柱穴・柱穴様ピット	その他	河川跡	計
5	1	5	1	2	2	110	1	1	128

第4表 種別遺物一覧

摘 要	P	S	C	I	W	計
遺 構	36	4	1		1	42
発掘区	159	5		5	1	170
小 計	195	9	1	5	2	212
2023年分	27					27
合計	222	9	1	5	2	239

第5表 種別土器類一覧

摘 要	8			計
	1. 磁器	2. 陶器	3. 土器	
遺 構	19	12	5	36
発掘区	99	53	7	159
小 計	118	65	12	195
2023年分	21	4	2	27
合計	139	69	14	222



第5図 土層断面図

第Ⅱ章 遺構と遺物

1 竪穴建物跡

調査区内からは、中世～近世に位置付けられる竪穴建物跡を5軒検出した。

(1) 竪穴建物跡1455 (S I 1455)

位置 調査区の北西部A O - 22・23区に位置する。遺構北部は調査区外に広がっている。試掘・確認調査時には遺構として認識できなかった。遺構内には井戸跡1450が所在する。この井戸跡と本遺構との新旧関係については、井戸跡1450が古い。

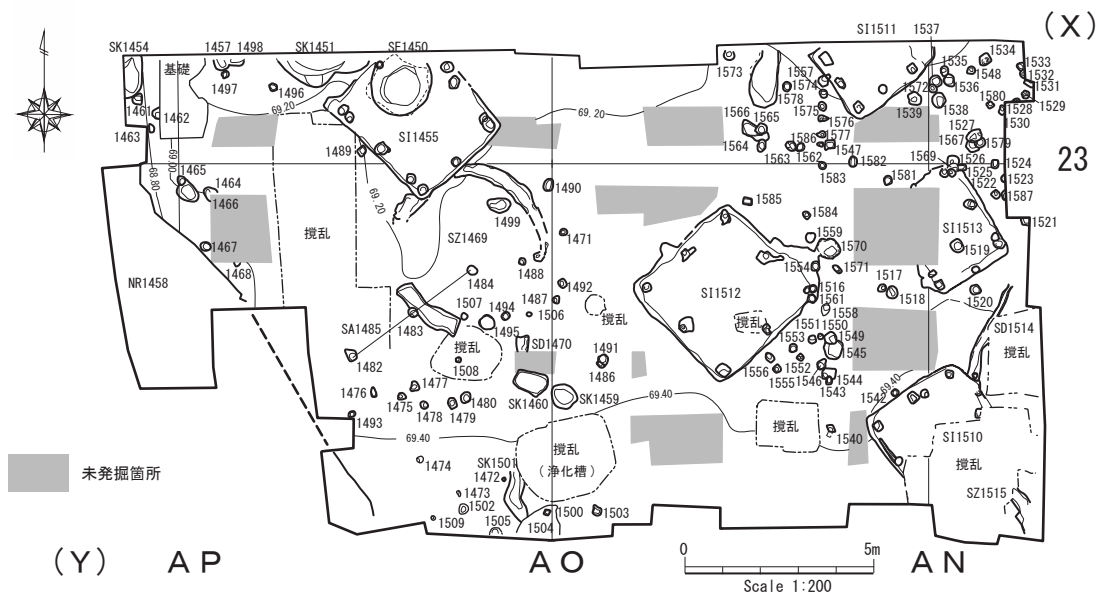
遺構 平面形は南東－北西方向を長軸とする隅丸方形を呈する。確認した部分の規模は、長径で3.5 m、短径は3 mほどである。確認面からの深さは、もっとも深い部分で35cmである。

床面はⅣ層中に作られ、井戸跡1450と重複する部分については、貼床がなされている。確認部分の床面のしまりは長期間利用されたことを示すほどの硬さはない。竪穴の中央部からは、上屋の構築材とみなされる炭化材が検出されている。

炉跡やカマドはなく、柱穴と認められるものは12本検出された。いずれも壁付近に位置し、P 3とP 4、P 7とP 9が重複することから、少なくとも一度の建て替えが行われたと考えられる。柱穴の規模は、径18～35cmほどである。

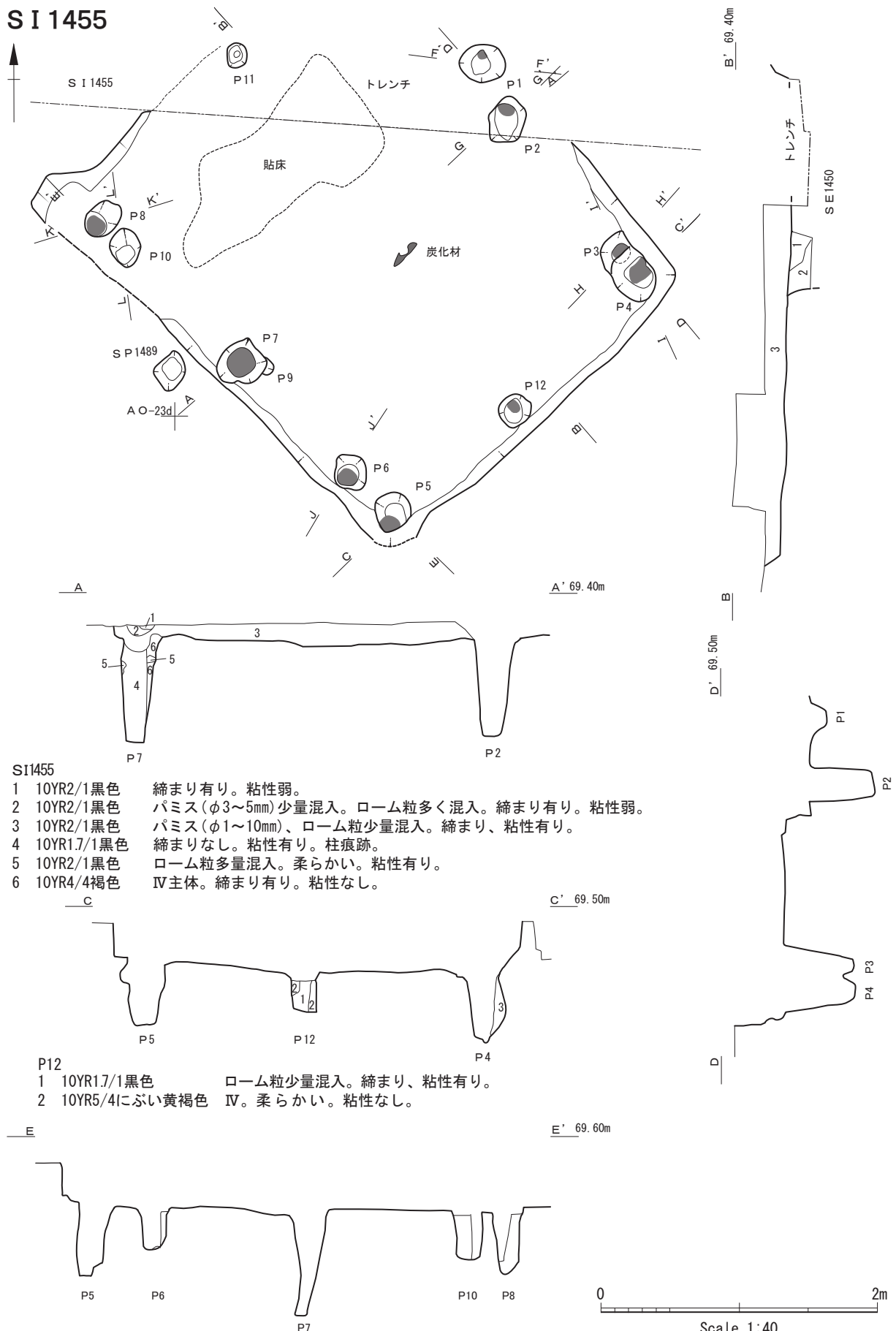
遺物 竪穴内からは、埋土中から陶器片1点が出土したのみである（第8図1）。第8図1は瀬戸・美濃焼の腰折皿である。秋田県弘田柵跡調査事務所小山美紀氏の協力を得て、公益財団法人 瀬戸市文化振興財団 埋蔵文化財センター副所長河合君近氏、山本智子氏に写真にて鑑定していただいたところ、腰折皿で古瀬戸後Ⅳ期の新段階に位置付けられるとのご教示をいただいた。

時期等 本竪穴は、炉跡などが確認されていないことと、支柱穴が確認されたことから、一定期間利用された施設であったものとみられる。時期は、伴出遺物がなく決め手に欠くものの、中世の竪穴建物である可能性が高い。



第6図 遺構配置図

S I 1455



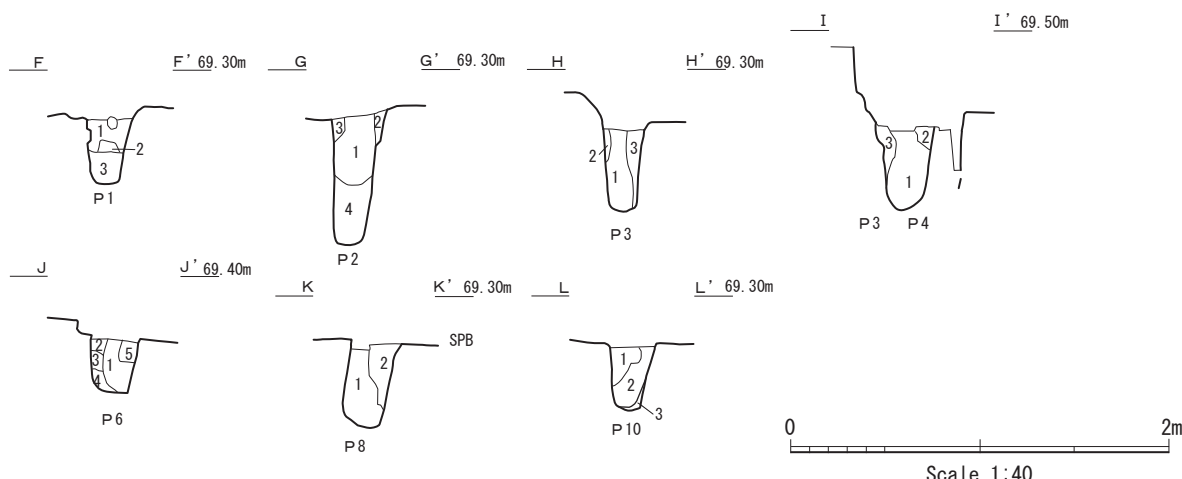
S I 1455

- | | | |
|---|-------------|-------------------------------------|
| 1 | 10YR2/1黒色 | 締まり有り。粘性弱。 |
| 2 | 10YR2/1黒色 | パミス(φ3~5mm)少量混入。ローム粒多く混入。締まり有り。粘性弱。 |
| 3 | 10YR2/1黒色 | パミス(φ1~10mm)、ローム粒少量混入。締まり、粘性有り。 |
| 4 | 10YR1.7/1黒色 | 締まりなし。粘性有り。柱痕跡。 |
| 5 | 10YR2/1黒色 | ローム粒多量混入。柔らかい。粘性有り。 |
| 6 | 10YR4/4褐色 | IV主体。締まり有り。粘性なし。 |

P12

- | | | |
|---|---------------|--------------------|
| 1 | 10YR1.7/1黒色 | ローム粒少量混入。締まり、粘性有り。 |
| 2 | 10YR5/4にぶい黄褐色 | IV。柔らかい。粘性なし。 |

第7図 竪穴建物跡1455(1)



- P1
 1 10YR1.7/1黒色 II。ローム粒少量混入。締まりなし。粘性有り。
 2 10YR1.7/1黒色 ロームブロック多量混入。締まり、粘性有り。
 3 10YR2/1 黒色 ロームブロック多量混入。締まりよし。粘性有り。

- P2
 1 10YR1.7/1黒色 II。ローム粒少量混入。柔らかい。粘性有り。
 2 10YR2/1黒色 ロームブロック多量混入。締まり有り。粘性弱。
 3 10YR5/6黄褐色 締まり有り。粘性なし。
 4 10YR2/1黒色 締まり弱。粘性有り。

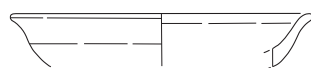
- P3
 1 10YR2/1黒色 締まりなし。粘性弱。
 2 10YR2/1黒色 IV粒少量混入。締まり、粘性弱。
 3 10YR3/2黒褐色 IV粒少量混入。礫混入。締まり、粘性なし。

- P4
 1 10YR2/1黒色 ロームブロック粒少量混入。柔らかい。粘性有り。
 2 10YR6/4にぶい黄橙色 IV主体。固く締まる。粘性なし。
 3 10YR5/4黄褐色 IV主体。締まり有り。粘性なし。

- P6
 1 10YR2/1黒色 ロームブロック、パミス(φ3~5mm)少量混入。締まり有り。粘性弱。
 2 10YR2/1黒色 パミス(φ1~3mm)微量混入。締まり、粘性弱。
 3 10YR4/4褐色 IV。締まり、粘性なし。
 4 10YR1.7/1黒色 パミス(φ1~3mm)微量混入。締まり有り。粘性弱。
 5 2.5Y5/3黄褐色 IV>II。固く締まる。粘性なし。

- P8
 1 10YR1.7/1黒色 IVブロック少量混入。締まりなし。粘性弱。
 2 2.5Y4/4オリーブ褐色 IV主体。締まり有り。粘性なし。

- P10
 1 10YR5/6黄褐色 IV。II微量混入。締まり有り。粘性なし。
 2 10YR1.7/1黒色 締まりなし。粘性有り。
 3 2.5Y5/4黄褐色 締まり、粘性なし。



1



第8図 竪穴建物跡1455(2)と出土遺物

(2) 竪穴建物跡1510 (S I 1510)

位置 試掘・確認調査時に確認したもので、調査区南東部のAM・N-22区に位置する。

遺構 竪穴は、3mほどの範囲を確認したにすぎないが、確認された部分から推測すると、長径3mほどの隅丸方形を呈するものとみなされる。確認面からの深さは30cmほど。確認部分の床面はIV層中にほぼ平坦に作られ、比較的硬く締まる。

竪穴内からは、壁付近から柱穴が5本、西壁付近に壁溝が1条検出されたほかは、炉跡などなく、出土遺物も床面上の礫8点のほかはない。柱穴の規模は径25～28cmほどである。礫は上面が一部被熱していた。

時期等 試掘・確認調査の時点では、土層断面の観察から、竪穴とは判断できなかった。本竪穴は、一定期間利用された形跡がうかがえるものの、竪穴の構造等からみて居住用の施設とは言い難い。時期は中世以降とみなされる。

(3) 竪穴建物跡1511 (S I 1511)

位置 調査区北東部のAM・N-23区に位置する。遺構北部は調査区外に広がっている。

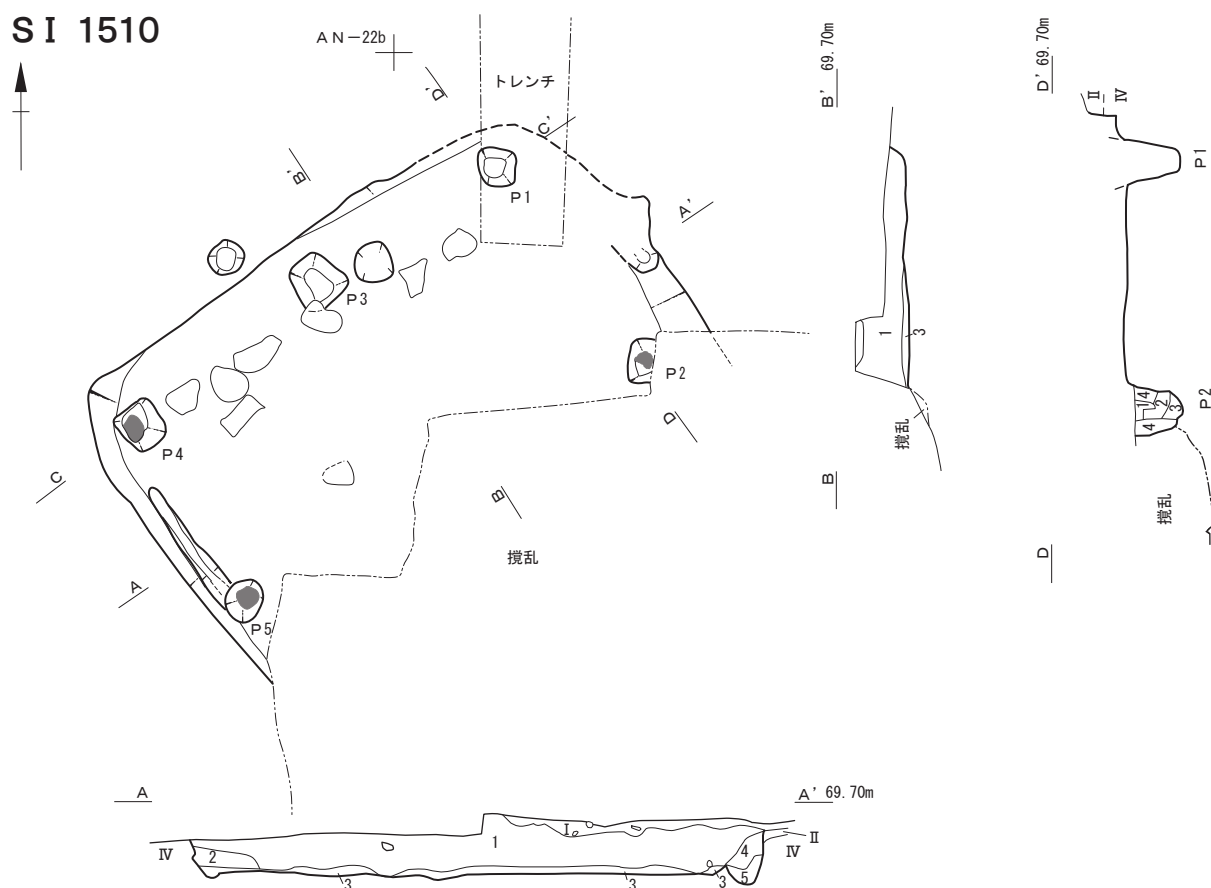
遺構 確認部分から類推すると、隅丸方形を呈した径3mに満たない小型の施設とみなされる。東側を向いた舌状の張り出し部をもつ。規模は長径2.8m、短径2.2mほど、確認面からの深さは30cmほどである。張り出し部の規模は幅65cm以上、長さ45cmほどである。壁は比較的急角度で立ち上がる。床面はIV層を掘り込んで、ほぼ平坦に作られており、比較的硬く締まっている。下層から焼土が検出されたものの、炉跡やカマドの施設は確認部分にはない。柱穴は5本検出された。壁から15cmほど内側に80～90cm間隔に並ぶ。大きさは径22～36cmで床面からの深さは、深いもので35cm、浅いもので8cmほどである。柱痕跡から厚い板状を呈し、建物の壁側に据えられていたと推測される。また、竪穴の埋土は腐植土を主体として2層に区分される。

遺物 竪穴内から得られた遺物は、土器・陶磁器片19点である。このうち、第10図1～4の床面出土の遺物は、本竪穴に伴う可能性が高い。その出土状況は第10図上段に示すとおりである。

第10図1～4は床面出土、5～10は埋土中ほどから上部にかけて得られた遺物。1は瀬戸・美濃焼の天目茶碗の口縁～体部。口径12.0cm、全体の約1/12を残す。口縁部は短く直立気味になり、端部が外反する。釉は黒褐色で、光沢をもつ。わずかに残る釉がかからない部分は、鉄釉をうすく化粧がけする。胎土は灰白色である。2は中国製（漳州窯系）陶磁器の染付皿で口径9.1cm、器高1.9cmである。口縁部はやや内湾し、高台は接地面が平坦な面をもつ。外面は口縁部に太い界線、その下に三角形の幾何学文様で、内面は口縁部と見込み周辺に太い1条の界線を配する。高台は釉を剥ぎとり、見込みも輪状に釉を剥ぎとり、露胎部はにぶい黄橙色を呈する。16世紀後半頃のものである。3は瀬戸・美濃焼で口径10.1cm、器高2.8cmの灰釉丸皿である。体部から口縁部はゆるい稜をもって屈曲し、口縁端部は丸くおさまる。高台は付高台で高台の内縁は低く削り出され、その内側に輪トチの痕跡がみられる。見込み中央に菊花文が押印される。釉はオリーブ色の灰釉で、素地は灰白色で、ややがさつである。熱を受けたと思われ、器面がざらつく。大窯第2段階（藤澤1993）の所産であろう。4は土器の高台の転用品とみられ、灯明皿として使用された痕跡がある。

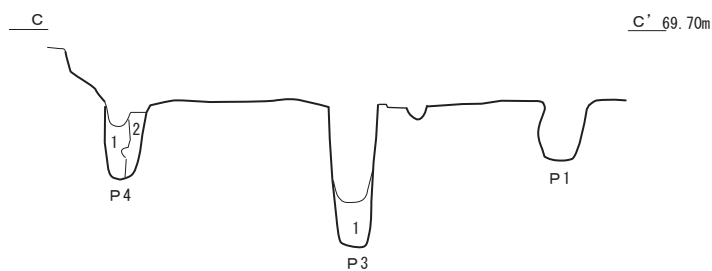
5～8は中国製陶磁器の染付。5は漳州窯系の口縁部の小破片である。口縁部には内外面とも1条の界線があり、外面はこの下に三角形状の文様を配する。6は景德鎮窯系の稜花皿で、器壁のうすい

SI 1510



SI1510

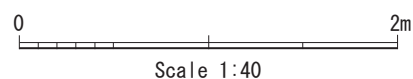
- | | | |
|---|--------------------|--------------------------------|
| 1 | 10YR2/1黒色 | ロームブロック少量混入。締まりよし。粘性弱。 |
| 2 | 10YR2/1黒色 | シルト質。ロームブロック少量混入。締まり有り。粘性弱。 |
| 3 | 10YR1.7/1黒色 | 締まり有り。粘性弱。 |
| 4 | 10YR2/1黒色 | 白色パミス(φ1~10mm)微量混入。固く締まる。粘性なし。 |
| 5 | 10YR2/1黒色+2.5Y暗灰黄色 | シルト。固く締まる。粘性なし。 |



- P3
1 2.5Y2/1 黒色 砂質。締まりなし。粘性有り。

- P4
1 10YR1.7/1黒色 ローム粒少量混入。柔らかい。粘性有り。
2 10YR5/4にぶい黄褐色 IV。締まり、粘性なし。

- P2
1 10YR2/1黒色 礫(φ15mm)少量混入。締まり有り。粘性弱。
2 25Y3/3暗オリーブ褐色 黒色土少量、礫(φ15~35mm)少量混入。締まりよし。粘性なし。
3 10YR1/1黒色 締まり、粘性有り。バミス(φ1~3mm)微量混入。
4 10YR5/4にぶい黄褐色 IV>II。バミス(φ2~5mm)少量混入。固く締まる。粘性なし。



第9図 竪穴建物跡1510

口縁部の小破片である。外面は口縁部に細い界線、その下に草花と思われる文様で、内面は口縁部に細い1条の界線、その下に草花文を配する。釉は比較的うすく、胎土は灰白色である。7・8は2同様内湾する皿で外面に三角形の幾何学文様のほかに1条の界線がめぐり、2と同様内面に1条の界線がめぐり、見込みは釉を剥ぎとられている。9・10は瀬戸・美濃焼の灰釉陶器。9は口径10.4cm、器高2.5cmの灰釉丸皿である。3と同様体部から口縁部はゆるい稜をもって屈曲し、口縁端部は丸くおさまる。高台は付高台である。釉はオリーブ色の灰釉で、素地は黄灰色で、ややがさつである。熱を受けたと思われる、器面がざらつく。10は内禿皿の底部破片で、高台は低く削りだされたもので、その外側にトチンの痕跡がみられる。底部内面は釉が拭いとられる。釉はオリーブ色の灰釉で、淡黄色で、がさつである。大窯第3～第4段階の所産であろう。

時期等 本竪穴は、床面がよく締まっていることから、比較的長期間利用された施設と判断されるものの、竪穴の構造等からみて居住用の施設とは言い難い。竪穴内から焼土が検出され、被熱した遺物が多いことから、焼失建物と考えられる。時期は16世紀後半とみなされる。

(4) 竪穴建物跡1512 (S I 1512)

位置 調査区中央のAN-22区に位置する。Ⅱ層掘り下げ後に黒色土の落ち込みとして検出した。

遺構 竪穴は、径3.5mほどの隅丸方形を呈し、東側に張り出し部がある構造をなす。確認面からの深さは30cmほどと浅い。張り出し部は浅く、規模などは不明瞭であるが、長さ0.6m、幅1.4mほどである。壁は比較的急角度で立ち上がる。床面はⅣ層中に作られ、締まっている。炉跡などはなく、柱穴は四隅とその中間に8本確認された。柱穴の大きさは径25～50cm、深さ30～70cmである。

埋土の堆積状態は、黒色を主体として2層堆積している。

遺物 伴出遺物はなく、攪乱土中より近世磁器片4点、石製品1点が得られている。第12図1は肥前系磁器の染付の碗である。焼継ぎ痕がみられる。肥前Ⅴ期の所産である。第12図2は砥石で、断面方形で3.7×3.2cmを測る。表面と裏面に擦痕がみられる。表面にススが付着している。石材は頁岩であろう。

時期等 本竪穴は、床面の締まり方からみて、一定期間利用された形跡がうかがえるものの、竪穴の構造等からみて居住用の施設とは言い難い。時期は伴出遺物がないため判然としないが、中世とみなされる。

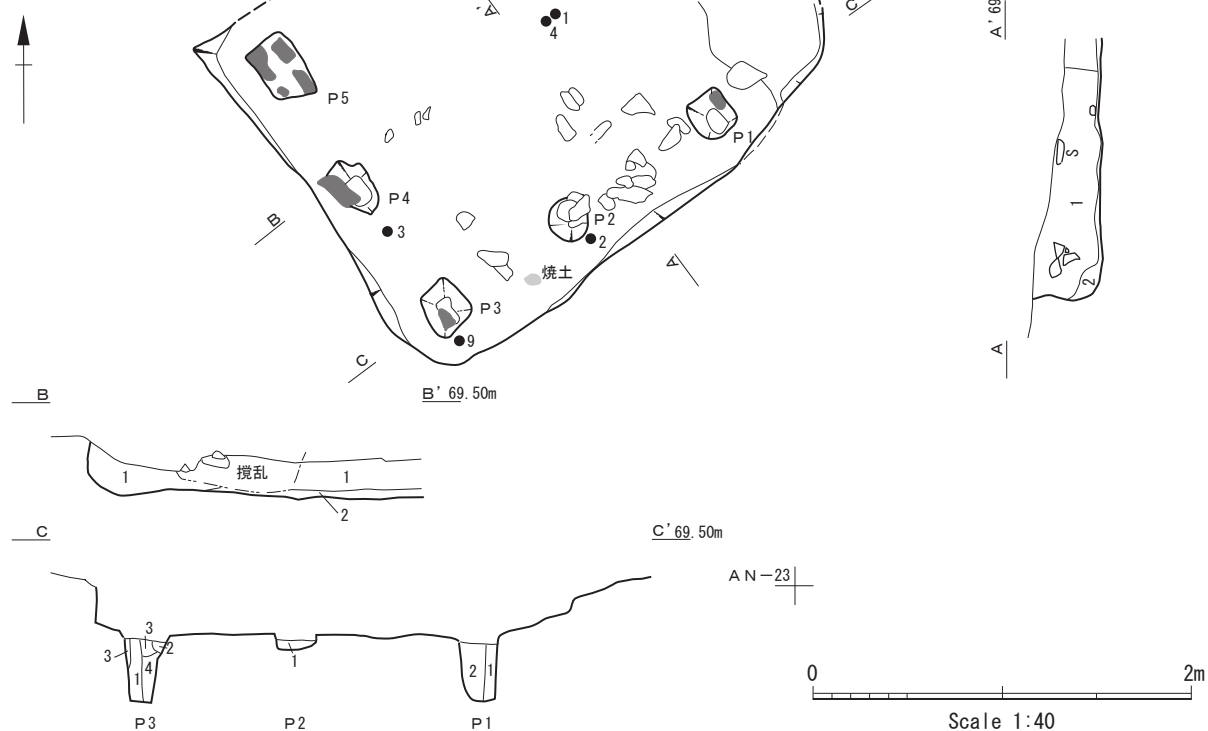
(5) 竪穴建物跡1513 (S I 1513)

位置 本遺構は、調査区東端付近のAM・N-22区に位置する。試掘・確認調査時に黒色土の落ち込みとして確認したものである。竪穴の北西部は調査対象区外に拡がっている。

遺構 竪穴は、隅丸方形を呈すると推測される。規模は長径2.9m、短径2.4mほど、確認面からの深さ15cmほどである。床面はⅣ層中に作られ、締まりはよい。炉跡などは確認されていない。柱穴は壁際から9本検出された。柱穴の規模は、径20～35cmほどである。また、竪穴内南側で柱穴1519が確認されており、これも本竪穴に伴う可能性がある。北東壁の柱穴はそれぞれ重複しており、少なくとも1回の建て替えがあったと推測される。

遺物 伴出遺物はなく、埋土中より近世染付磁器片2点が得られている。第13図1・2は肥前磁器の碗である。1は体部破片で寿文が見られるもので、肥前Ⅲ期のうち1650～70年代のものである。2は

SI 1511



SI1511

- 1 10YR2/1黒色 ロームブロック、パミス(φ1~3mm)少量、礫(φ5~300mm)多量混入。締まりよし。粘性弱。
 2 10YR2/1黒色 ローム粒微量混入。締まりよし。粘性弱。

P1

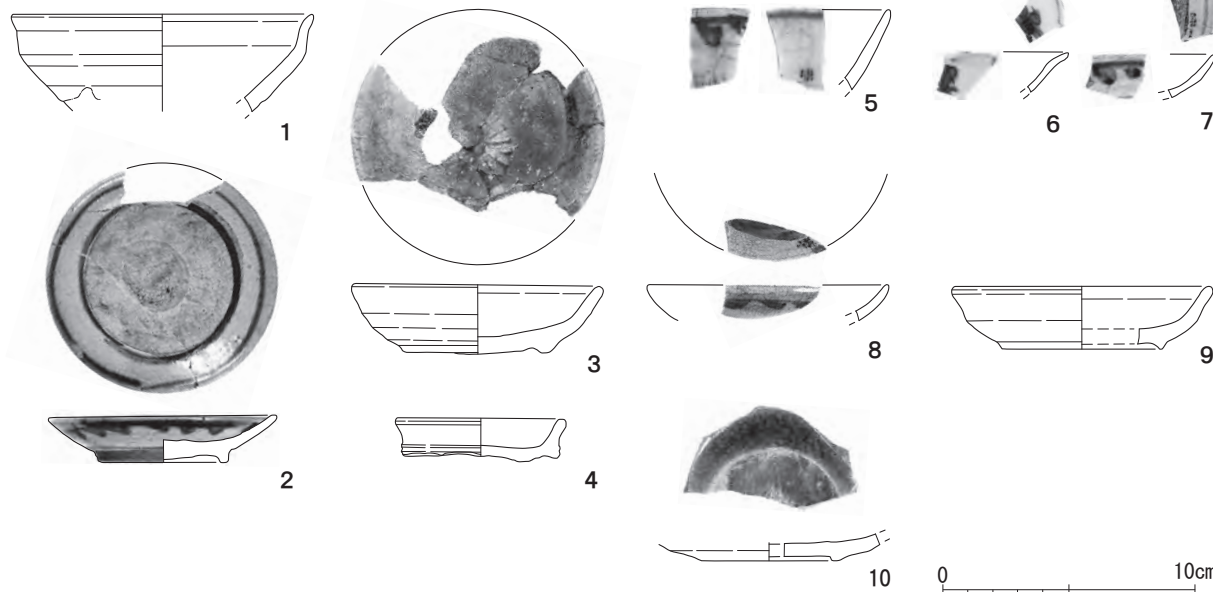
- 1 10YR1.7/1黒色 パミス(φ2~15mm)少量混入。締まり有り。粘性弱。
 2 10YR4/2灰黄褐色 IV主体。パミス(φ2~10mm)、礫(φ40mm)混入。締まり有り。粘性なし。

P2

- 1 10YR4/3にぶい黄褐色 IV主体。礫(φ3~45mm)混入。締まり有り。粘性なし。

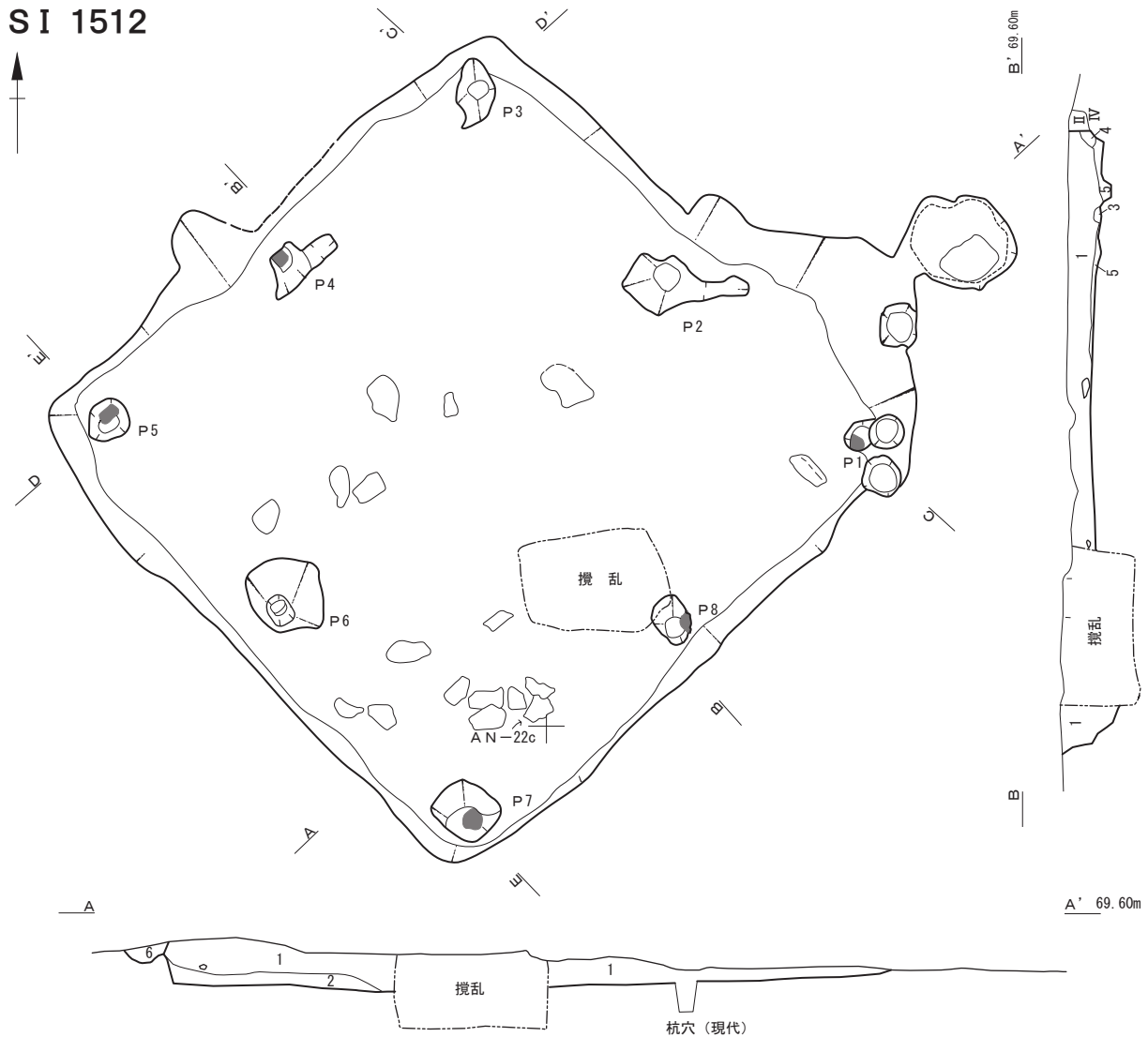
P3

- 1 10YR1.7/1黒色 ローム粒少量混入。締まり有り。粘性弱。
 2 25Y2/2黒褐色 パミス(φ10mm)少量混入。柔らかい。粘性なし。
 3 10YR5/4にぶい黄褐色 IV。締まりよし。粘性なし。
 4 10YR4/3にぶい黄褐色 IV。柔らかい。粘性なし。



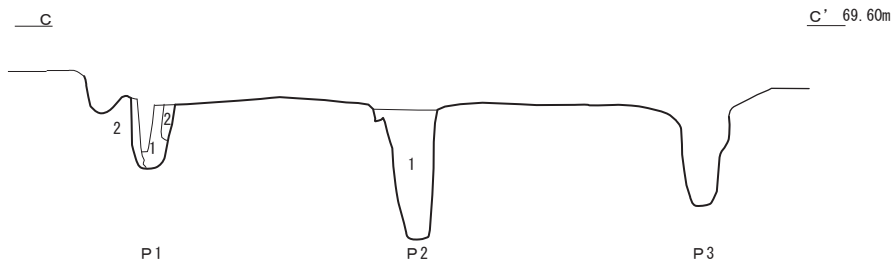
第10図 竖穴建物跡1511と出土遺物

SI 1512



SI1512

- | | | |
|---|-------------|--|
| 1 | 10YR2/1黒色 | パミス(φ1~10mm)、ロームブロック、礫(φ5~30mm)少量混入。締まりよし。粘性弱。 |
| 2 | 10YR1.7/1黒色 | ロームブロック微量混入。締まり、粘性有り。 |
| 3 | 10YR1.7/1黒色 | ロームブロック多量混入。固く締まる。粘性弱。 |
| 4 | 10YR2/1黒色 | 礫(φ20~25mm)、ローム粒少量混入。締まり、粘性有り。 |
| 5 | 10YR2/1黒色 | パミス(φ1~5mm)微量混入。締まり有り。粘性弱。 |
| 6 | 10YR2/1黒色 | シルト質。パミス(φ25mm)、礫(φ2~25mm)少量混入。締まり有り。粘性弱。 |

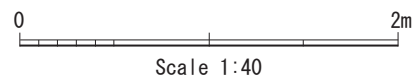


P1

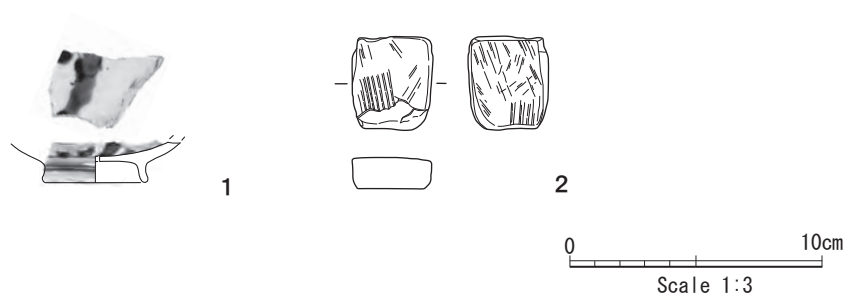
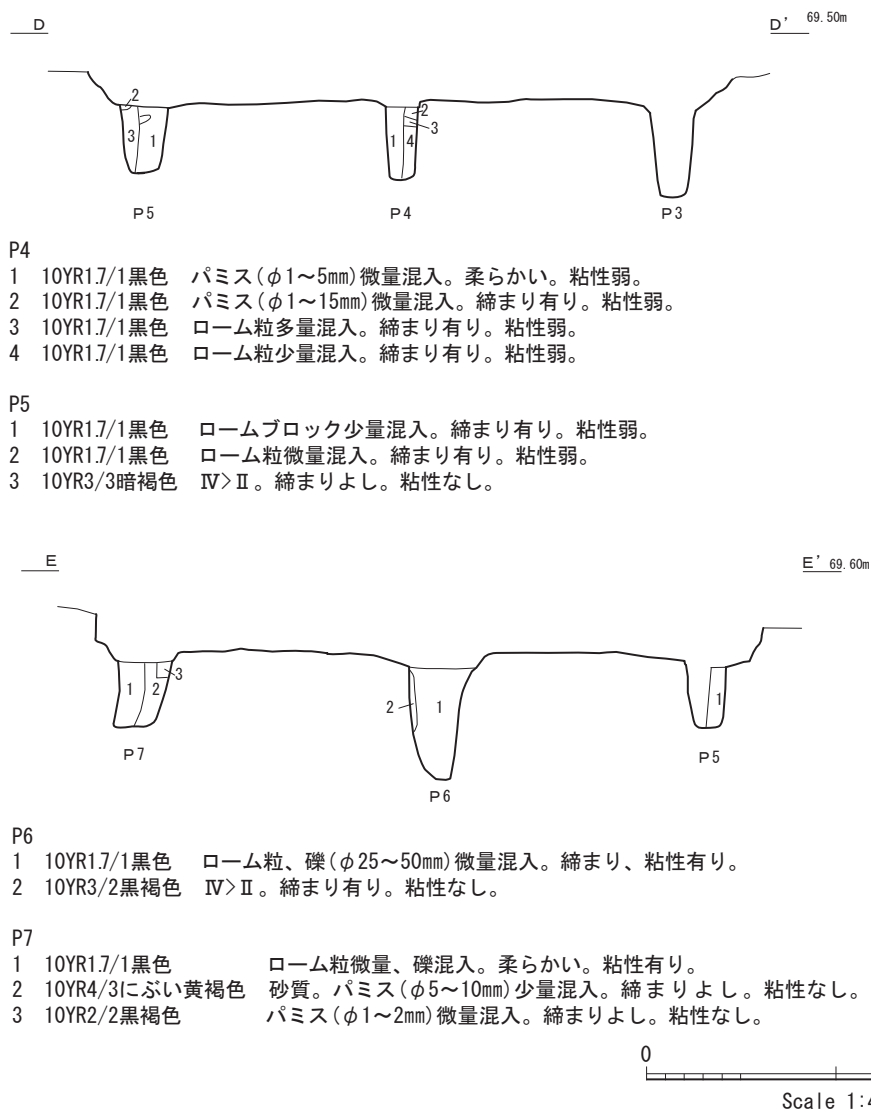
- | | | |
|---|-------------|--------------------------|
| 1 | 10YR1.7/1黒色 | シルト質。ローム粒微量混入。締まりよし。粘性弱。 |
| 2 | 10YR2/1黒色 | シルト質。ローム粒微量混入。締まり有り。粘性弱。 |

P2

- | | | |
|---|-------------|-----------------------|
| 1 | 10YR1.7/1黒色 | ロームブロック少量混入。締まり、粘性有り。 |
|---|-------------|-----------------------|

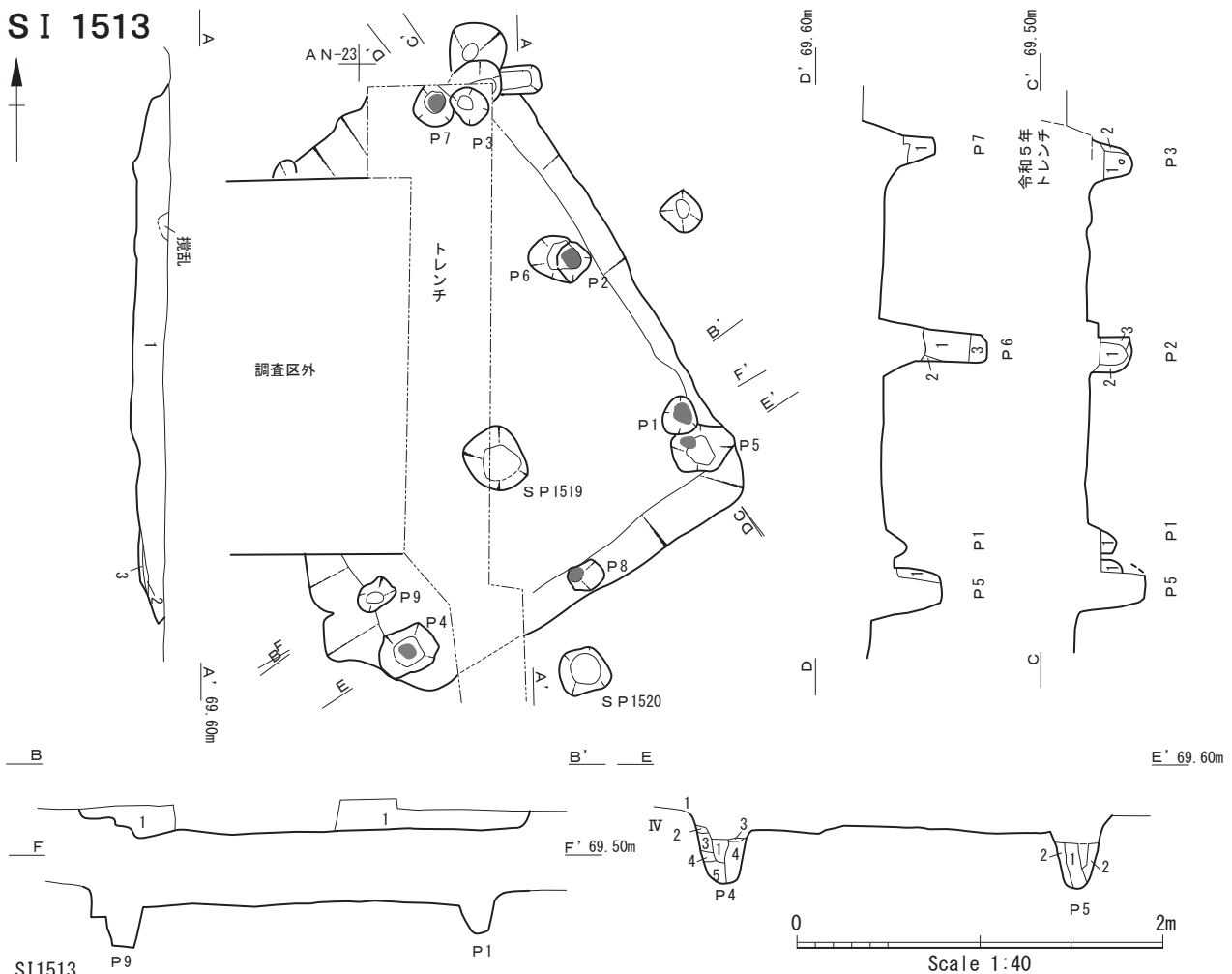


第11図 竪穴建物跡1512(1)



第12図 竪穴建物跡1512(2)と出土遺物

SI 1513



SI1513

- | | |
|-----------------|----------------------------------|
| 1 10YR1.7/1黒色 | Ⅱ.シルト質。礫(φ1~40mm)少量混入。締まりよし。粘性弱。 |
| 2 10YR4/3にぶい黄褐色 | Ⅳ主体。砂。固く締まる。粘性なし。 |
| 3 10YR1.7/1黒色 | Ⅳブロック少量混入。締まり有り。粘性なし。 |

P1

- 1 10YR1.7/1黒色 締まりなし。粘性有り。

P2

- | | |
|---------------|------------------------|
| 1 10YR1.7/1黒色 | ロームブロック少量混入。柔らかい。粘性有り。 |
| 2 10YR4/4褐色 | 黒色土少量混入。締まり有り。粘性なし。 |
| 3 10YR5/4褐色 | 締まり有り。粘性なし。 |

P3

- | | |
|-----------------|--------------------------|
| 1 10YR1.7/1黒色 | ロームブロック、礫少量混入。柔らかい。粘性有り。 |
| 2 10YR4/3にぶい黄褐色 | 締まりよし。粘性なし。 |

P4

- | | |
|-----------------|-----------------------------|
| 1 10YR1.7/1黒色 | 固く締まる。粘性有り。 |
| 2 10YR4/3にぶい黄褐色 | 柔らかい。粘性なし。 |
| 3 10YR1.7/1黒褐色 | パミス(φ2~3mm)少量混入。締まり有り。粘性なし。 |
| 4 10YR4/3にぶい黄褐色 | 締まり有り。粘性なし。 |
| 5 10YR1.7/1黒色 | 締まり、粘性有り。 |

P5

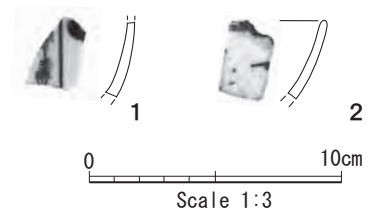
- | | |
|-----------------|--------------------------------|
| 1 10YR1.7/1黒色 | 締まり、粘性有り。 |
| 2 10YR4/3にぶい黄褐色 | Ⅳ主体。礫(φ10~25mm)少量混入。締まり弱。粘性なし。 |

P6

- | | |
|-----------------|---------------------|
| 1 10YR1.7/1黒色 | ローム粒少量混入。柔らかい。粘性有り。 |
| 2 10YR4/3にぶい黄褐色 | Ⅳ>Ⅱ。柔らかい。粘性なし。 |
| 3 2.5Y5/4暗褐色 | Ⅳ主体。締まりよし。粘性なし。 |

P7

- | | |
|---------------|--------------------|
| 1 10YR1.7/1黒色 | ローム粒少量混入。柔らかい。粘性強。 |
|---------------|--------------------|



第13図 竪穴建物跡1513と出土遺物

外面のみ染付される口縁部破片で、肥前Ⅳ期のうち18世紀前半のものである。

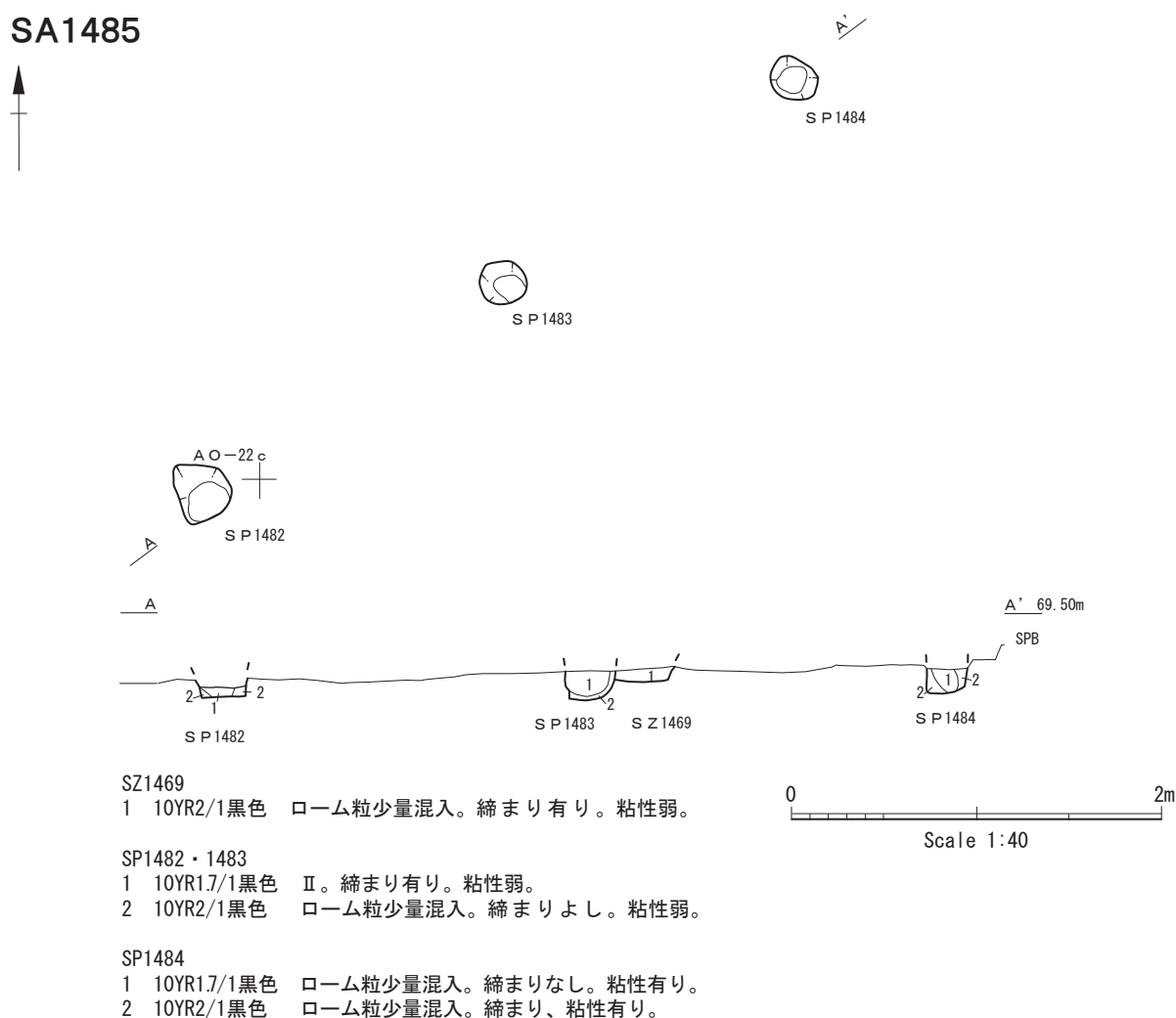
時期等 本竪穴は、床面の締まり方からみて、一定期間利用された形跡がうかがえるものの、炉跡などが存在しない点からみて、居住用の施設とは言い難い。時期は伴出遺物がなく判然としないが、肥前磁器が出土していることから近世まで降る可能性がある。

2 柵跡

(1) 柵跡1485 (S A 1485)

位置 AO-22区に位置する。S P1483はS Z1469と重複し、新旧関係はS P1483が新しい。

遺構 2間（4 m）の北東－南西方向（N－53°－E）のものである。柱間寸法は北から1.9m、2.0 mを測る。柱穴掘り方は径25～30cmの円形ないし隅丸方形で、確認面からの深さ8～15cmである。竪穴建物跡1455と平行することから、関連する施設と考えられる。



第14図 柵跡1485

3 井戸跡

(1) 井戸跡1450

位置 試掘・確認調査時に確認されたもので、調査区北西部A O-23区に位置し、本遺構の北側の一部は調査区外に広がる。竪穴建物跡1455と重複する。新旧関係は本井戸跡のほうが古い。

遺構 径1.05mの不整な円形素掘りの井戸である。深さ1.9mを測り、底面径が1.6mと断面形がフラスコ状を呈する。湧水はない。埋土の上層～中層は黒色土が充満しており、埋め戻しがきわめて短時間で行われたと考えられる。

遺物 土師器皿片2点、土製具1点、すり石1点、炭化した木製品1点が出土している（第15図1～4）。土師器皿は製作技法に2種類ある。1は底部が残存していないため断定できないが、手づくねの可能性があるもので、口縁部内外面を横ナデするタイプ、2はロクロ成形で底部を回転糸切りするタイプである。1は底部を欠くため、全体の器形は不明である。体部から口縁部はやや内湾し、口縁端部は丸くおさまる。形態等の特徴から13世紀後半の鎌倉のものに類似する¹⁾。内外面にススが付着する。なお、ススの付着状況は実測図に網目で示した。1/12残存。胎土精良、にぶい黄橙色。3層出土。2は口径8.0cm、体部下端が若干くびれる。糸切の目がはっきりとしており、13世紀以降のものと考えられる²⁾。胎土は1に比して細砂粒を多く含んでおり、器面がざらついている。下層（9層）出土。3は器種不明の土製具で、焼成粘土塊に類似する。炉壁の一部かもしれない。3層出土。4は2点が接合したもので、扁平な川原石に擦痕がみられる。顕著な磨滅はみられない。埋土出土。

時期等 本井戸跡は、出土遺物から、13世紀後半以降の井戸とみなされる。

4 溝跡・土坑・その他

(1) 溝跡

溝跡1470

位置 調査区中央部のA O-22区に位置し、本溝跡の南側は調査区外にのびる。

遺構 東偏約15度で竪穴建物跡・河川跡の方位と一致しない。確認した範囲での長さは40cm、幅44cm、深さ20cmを測る。上部は削平を受けており、掘り込み面は不明である。埋土は黒色土を主体とし、2層に分けることができる。出土遺物はない。

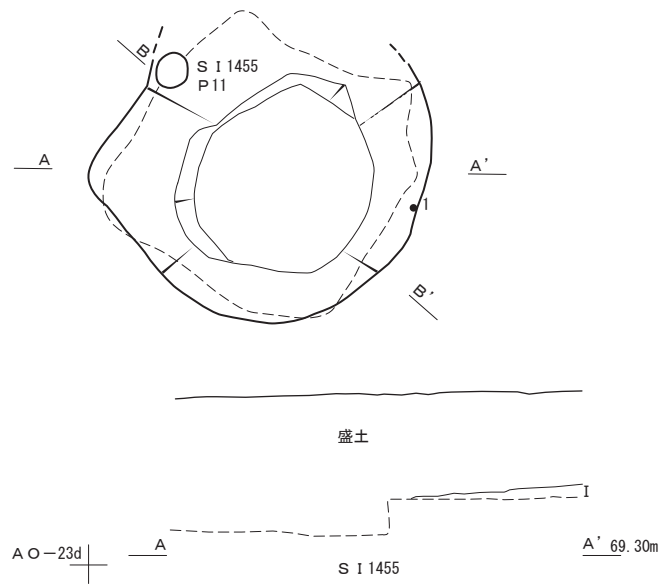
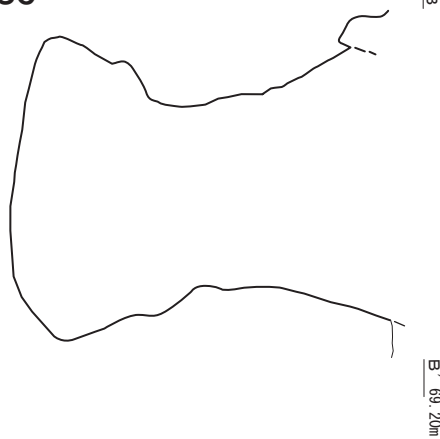
溝跡1514

位置 調査区東端部のA M-22区にある北東-南西方向にのびる溝である。竪穴建物跡1510と重複しており、新旧関係は本溝跡のほうが古い。

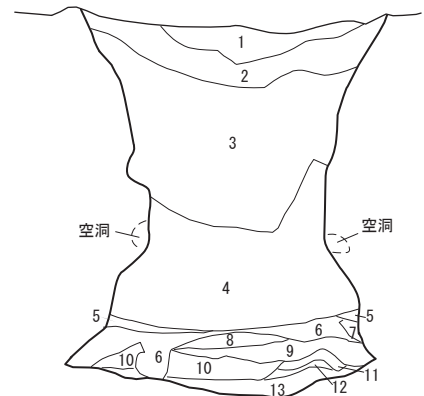
遺構 北東側は徐々に浅くなり消滅し、南西側は竪穴建物跡に切られていたため確認できなかった。幅10～32cm、最深6cmを測る。埋土は黒色土である。遺物は出土していない。

時期等 本溝跡の南側はやや弧状をなし、円形周溝の一部の可能性がある。時期は出土遺物がなく不明であるが、竪穴建物跡より古いことから、少なくとも中世以前に構築されたものと考えられる。

SE1450



A O-23d



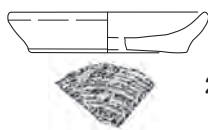
0 2m
Scale 1:40

SE1450

- | | |
|-------------------------|-----------------------------------|
| 1 10YR5/4にぶい黄褐色 | IV> II。固く締まる。粘性弱。 |
| 2 10YR2/1黒色 | ロームブロック多量混入。締まり、粘性有り。 |
| 3 10YR1.7/1黒色 | パミス(φ1~25mm)少量混入。締まりよし。粘性弱。 |
| 4 10YR2/1黒色 | パミス(φ1~20mm)ロームブロック少量混入。締まり、粘性有り。 |
| 5 2.5Y7/2灰黄色 | IV。締まり有り。粘性なし。 |
| 6 10YR2/1黒色 | ロームブロック多量混入。締まり、粘性有り。 |
| 7 10YR1.7/1黒色 | 柔らかい。粘性強。 |
| 8 2.5Y4/4オリーブ褐色 | IV> II。小礫(φ5~20mm)少量混入。締まり、粘性なし。 |
| 9 10YR1.7/1黒色 | 小礫(φ10~20mm)少量混入。締まりやや弱。粘性強。 |
| 10 10YR2/1黒色+2.5Y5/4黄褐色 | 締まり有り。粘性弱。 |
| 11 10YR4/4褐色 | IV。締まり有り。粘性なし。 |
| 12 10YR1.7/1黒色 | 柔らかい。粘性有り。 |
| 13 10YR4/1褐灰色 | 砂。固く締まる。粘性なし。 |



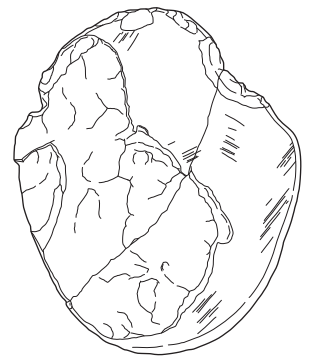
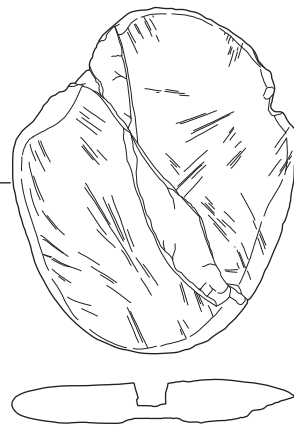
1



2



3



4

0 10cm
Scale 1:3

第15図 井戸跡1450と出土遺物

(2) 土坑

調査区内からは、土坑5基を検出した。これらは、調査区の西部に分布している。

土坑1451

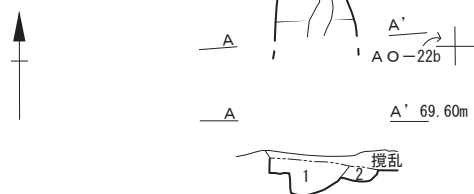
位置 試掘・確認調査時に確認されたもので、前述した井戸跡1450の西側に隣接する。本土坑の北側は調査区外に拡がり、南側の一部を調査した。

遺構 土坑は2.4mほどの範囲を確認したにすぎず、平面形や規模などは不明である。確認面からの深さ1.1mほどである。南部に段を有する。壁面の立ち上がりは明瞭である。底から上面まで礫やロームブロックが混入しており、井戸と同様に人為的に埋められたと考えられる。坑口付近に焼土が堆積する。

遺物 土坑内から出土した遺物は近世陶磁器片2点、土器片1点のみである。試掘・確認調査時の遺物を合わせると、陶磁器片13点、土器片1点、計14点となる。これらは時期的にばらつきがあり、小片であることから、後世の攪乱を受けたものと考えられ、一括性はない。第17図1・2は肥前磁器染付の碗。1は高台無釉の底部破片。肥前Ⅱ期のうち1640～1650年代。2は内外面に網目文が施される肥前Ⅳ期のうち18世紀前半のものである。3は肥前系の染付小皿の底部破片。高台に2本線、見込みに2重圈線が染付される。肥前Ⅴ期のうち、19世紀初めから幕末までのもので、在地で製作された可能性がある。4は京・信楽系の陶器の小碗とみられる底部破片。時期は江戸後期であろう。5は土師質土器の足付きの底部破片で、足は一個のみ遺存し、全体の数は不明である。体部下位に通風孔をもつ。内面はナデ、外面は削りである。器種は七厘かと考えられ、類品は近世の秋田市久保田城跡（秋田県埋蔵文化財センター編2024）にみられ、かならずしも特異なものではない。

時期等 埋土の堆積状態からみると掘りっぱなしであったことが窺えるものの、用途を特定するには至っていない。時期は伴出遺物がなく決め手に欠くものの、埋土の堆積状態や出土遺物からみて、近世に属する可能性がある。

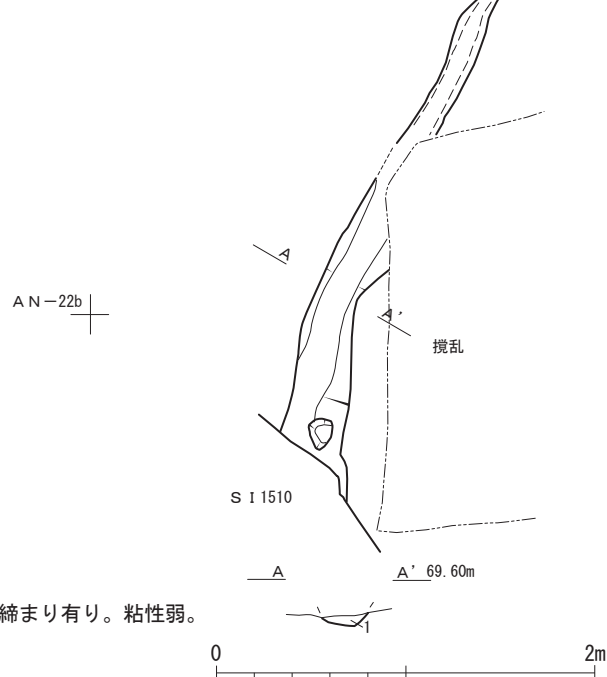
SD1470



SD1470

- 1 10YR1.7/1黒色 締まり、粘性有り。
2 10YR4/3にぶい黄褐色 固く締まる。粘性なし。

SD1514

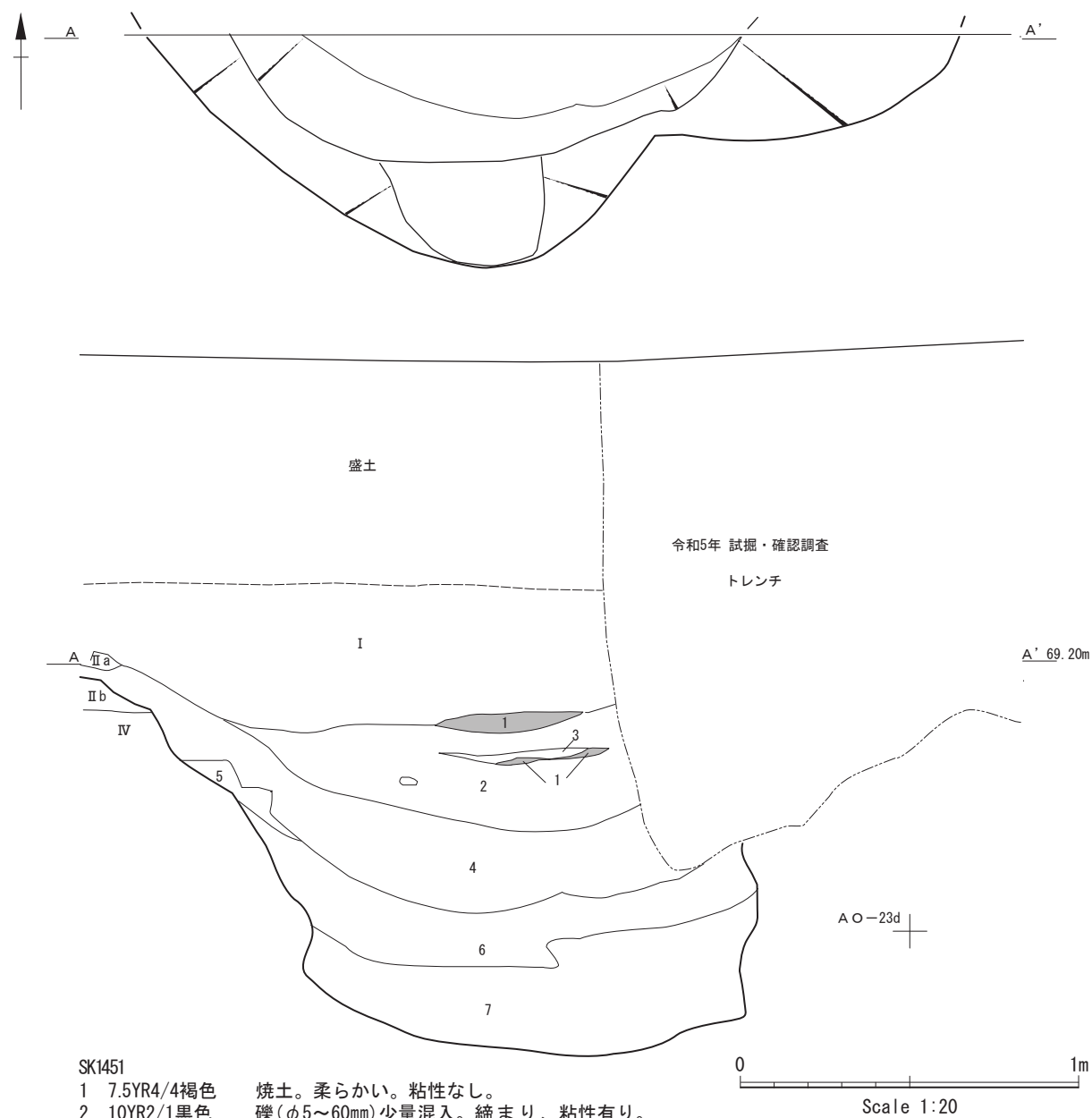


SD1514

- 1 10YR1.7/1黒色 II。シルト質。パミス(φ1～2mm)微量混入。締まり有り。粘性弱。

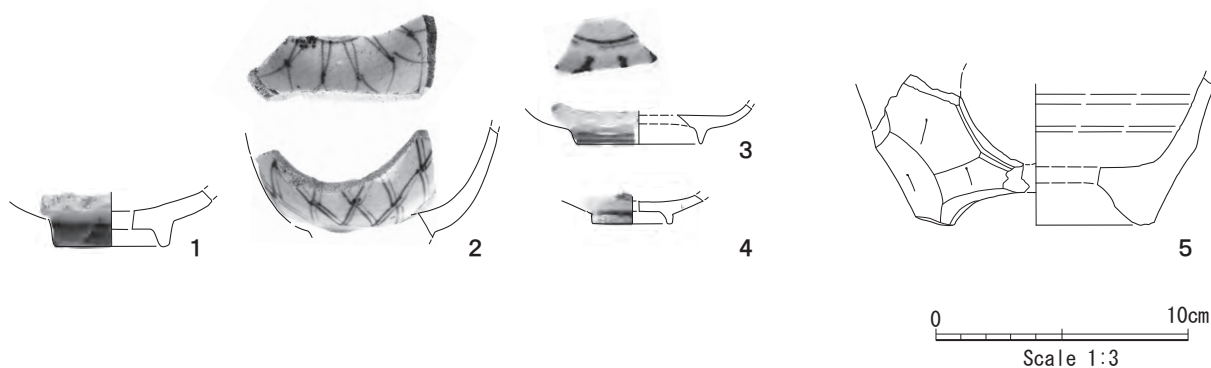
第16図 溝跡1470・1514

SK1451



SK1451

- | | |
|---------------|--------------------------|
| 1 7.5YR4/4褐色 | 焼土。柔らかい。粘性なし。 |
| 2 10YR2/1黒色 | 礫(φ5~60mm)少量混入。締まり、粘性有り。 |
| 3 10YR1.7/1黒色 | 締まりなし。粘性強。炭化物主体。 |
| 4 10YR2/2黒褐色 | ローム粒少量混入。固く締まる。粘性有り。 |
| 5 10YR4/4褐色 | IV主体。II少量混入。締まり弱。粘性なし。 |
| 6 10YR2/1黒色 | ロームブロック多量混入。締まり弱。粘性有り。 |
| 7 10YR1.7/1黒色 | ロームブロック微量混入。締まり、粘性有り。 |



第17図 土坑1451と出土遺物

土坑1454

位置 調査区北西端部A P-23区に位置し、北側と西側は調査区外に拡がり、南東部の一部を調査した。河川跡1458と重複し、新旧関係は本土坑のほうが新しい。

遺構 1×0.5mほどの範囲を確認したのみで、平面形は不明である。確認面からの深さ50cmほどである。埋土は褐色土ブロックを含む黒色土で、遺物は上層出土の近代以降の磁器1点のみである。

土坑1459

位置 A N-22区、前述した溝跡1470の南側に隣接する土坑である。

遺構 平面形はやや歪んだ円である。規模は確認面で長径70cmほど、短径64cmほど、確認面からの深さ15cmほどと浅い。底面はほぼ平坦である。埋土は黒色土である。

遺物 埋土中より土師質土器の体部片が1点出土した。底部に近い部位で、ロクロ成形である。器種は焙烙かと考えられる。

土坑1460

位置 A O-22区、前述した土坑1459の西側に隣接する土坑である。

遺構 平面形は南東-北西方向を長軸とするやや歪んだ不整な長円である。規模は確認面で長径90cm、短径50cmほどで、上面は削平を受けている。確認面からの深さ15cmほどと浅い。埋土は黒色土で、出土遺物はない。

土坑1501

位置 調査区南端部のA O-22区に位置し、南東側は不明遺構1504と重複し、新旧関係は本土坑のほうが古い。

遺構 北半部は病院の浄化槽により壊されており、平面形は不明である。規模は確認部分で長径1.3mほどである。確認面からの深さは25cmほどで、側壁はやや外傾して立ち上がる。埋土は礫を含み、締まりのよい黒褐色土である。出土遺物はない。

(3) 円形周溝

調査区西部、A O-22区から1基の「円形周溝」を検出した。このため発掘区内に他の「円形周溝」が残されている可能性があり、重機掘削ではⅡ層以下を人力で精査し、できるだけ円形周溝を傷つけないように配慮したが、調査区東部では円形周溝の可能性のある溝跡1条をのぞき、明確な円形周溝は確認されなかった。

円形周溝1469

位置 調査区西部、A O-22区に位置し、竪穴建物跡1455と重複する。新旧関係ははっきりと確認できなかったが、竪穴建物跡1455の埋土中に溝がのびていなかったことから、本遺構のほうが古いと考えられる。

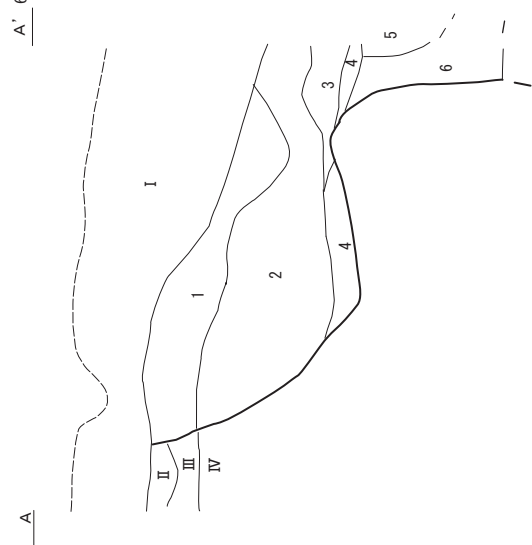
遺構 Ⅳ層中に残された南西部及び北部周溝の一部を確認したのみである。平面は馬蹄形と推定され、南側の立ち上がりから周溝は南東部で開いていたと思われる。周溝底面は鋤等による凹凸がある。出土遺物はない。

SK1454



SP1461

A' 69.40m

土
壁

SK1454

- | | |
|---------------|---------------------------|
| 1 10YR2/1 黒色 | IVブロック少量混入。締まり有り。粘性弱。 |
| 2 10YR1.7/1黒色 | 締まり、粘性有り。 |
| 3 10YR1.7/1黒色 | IVブロック少量混入。非常に固く締まる。粘性有り。 |
| 4 10YR1.7/1黒色 | IVブロック非常に多量混入。締まり有り。粘性弱。 |

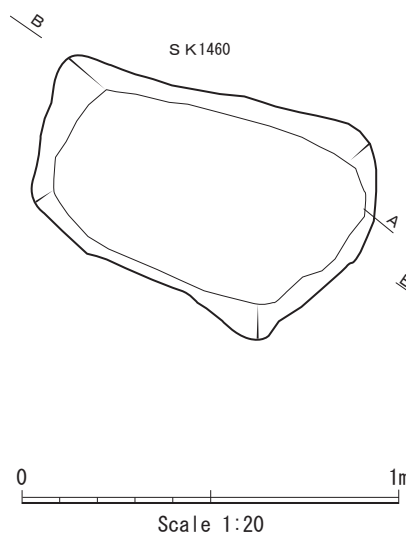
NR1458

- | | |
|---------------|-----------------------|
| 5 10YR1.7/1黒色 | IVブロック少量混入。締まりなし。粘性弱。 |
| 6 2.5Y5/6黄褐色 | IV>II。締まり、粘性なし。 |

SK1459・1460

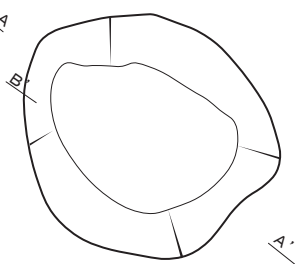
AO-22b

AP-23



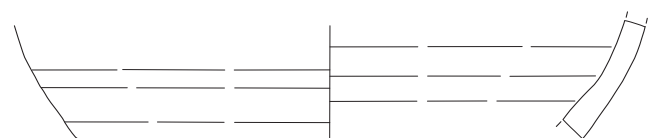
SK1460

SK1459



SK1459・SK1460

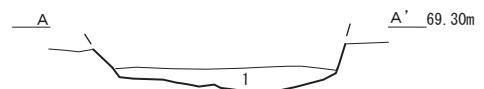
- | | |
|-------------|----------------------|
| 1 10YR2/1黒色 | ロームブロック混入。締まり有り。粘性弱。 |
|-------------|----------------------|



Scale 1:3

1-SK1459

B' 69.50m



A' 69.30m

第18図 土坑1454・1459・1460と出土遺物

円形周溝1515

位置 調査区南東端部のAM-22区に位置する。一部をIV層中に確認したのみである。東側は調査区外にのび、西側は病院の基礎により攪乱されており、不明である。

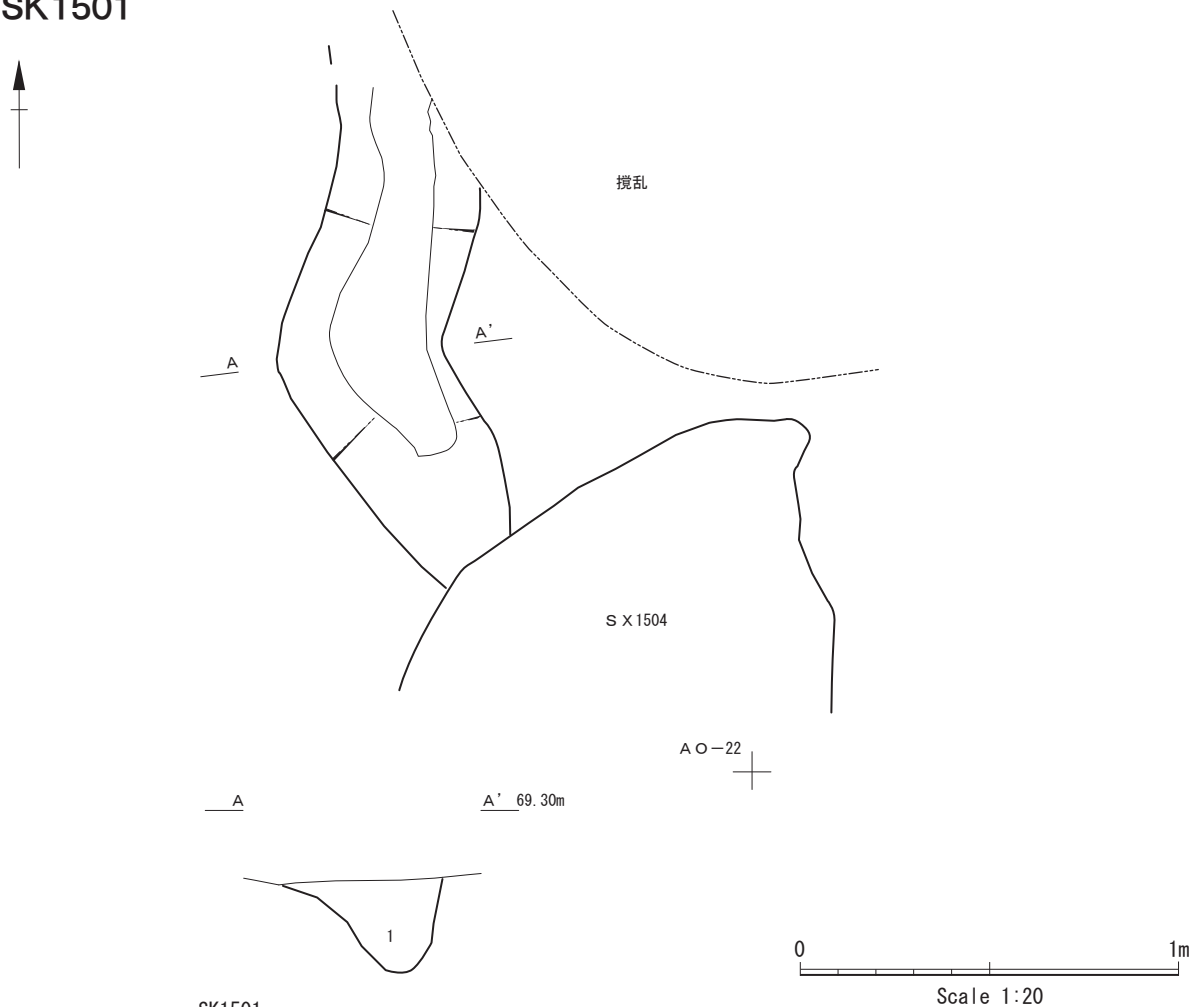
遺構 幅30cm、深さは深い部分でも15cmと浅く、埋土は黒色土である。出土遺物はない。

(4) 柱穴・柱穴様ピット

調査区内からは掘立柱建物や柵等にならなかった柱穴及び柱穴様ピットを110基検出した。ここではこれらの遺構の詳細については取り上げない。個々の情報については柱穴・柱穴様ピット一覧（42～44P）を参照されたい。柱穴からは陶磁器や石製品が出土した（第21図）。

第21図1は陶器の壺体部小破片で、外面は鉄釉、内面は無釉、胎土は灰色である。製作地は丹波かと考えられ、時期は16世紀頃である。竪穴建物跡1512に隣接する柱穴1585上面から出土した。第21図2・3は肥前磁器の染付碗。2は筒形碗の底部小破片。肥前Ⅱ期のうち1630～50年代。柱穴1561出土。3は肥前磁器の染付で丸形碗。肥前Ⅲ期。4は石製品の砥石で、仕上げ砥のコーナー部分とみられ、石質は粘板岩である。図右側及び上方は折損し、裏面も剥離する。図左側面に擦り切りの痕が明瞭に残る。3・4は柱穴1565上面から出土したものである。

SK1501

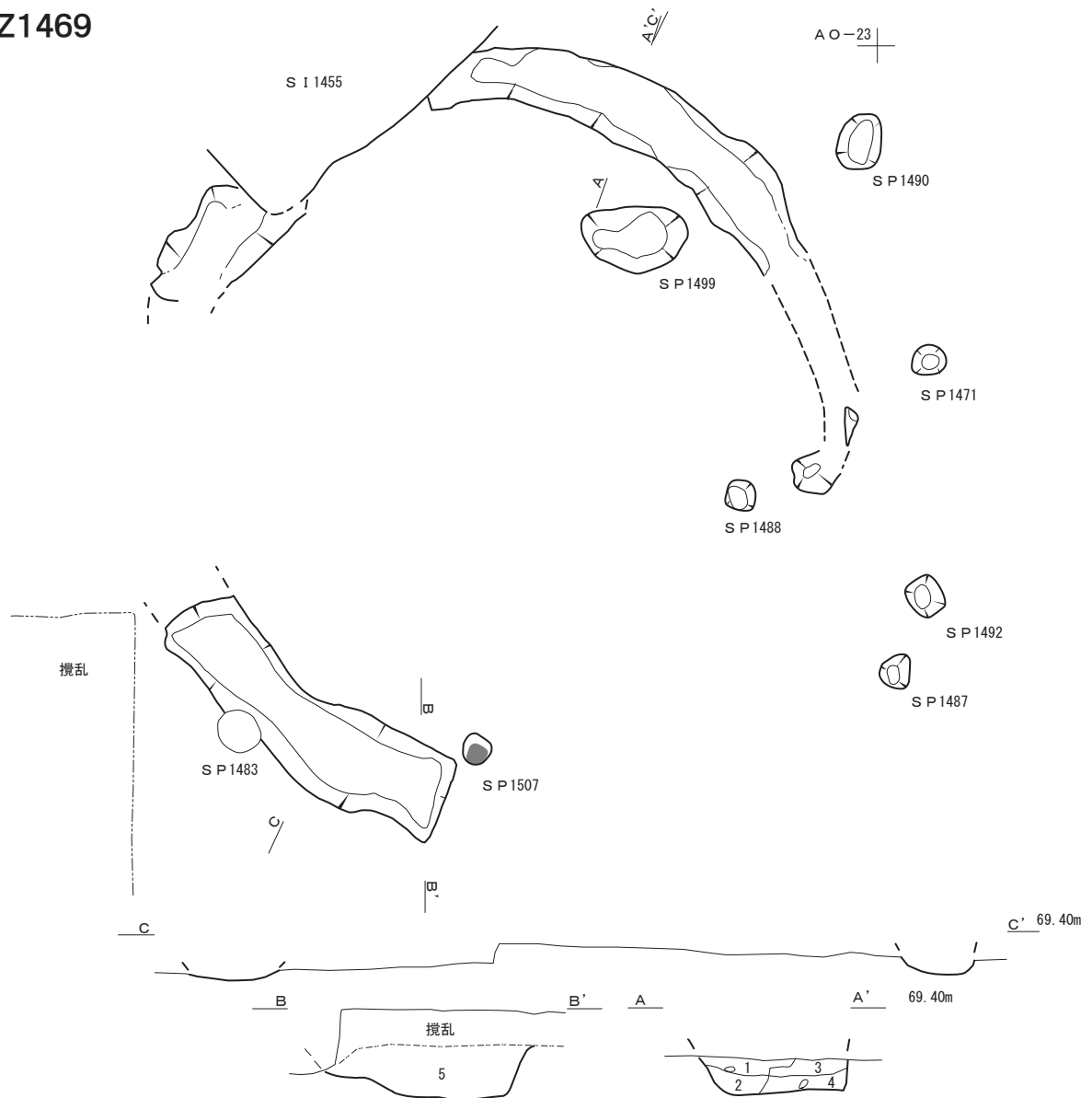


SK1501

1 10YR2/2黒褐色 礫(φ5～20mm)少量混入。締まりよし。粘性強。

第19図 土坑1501

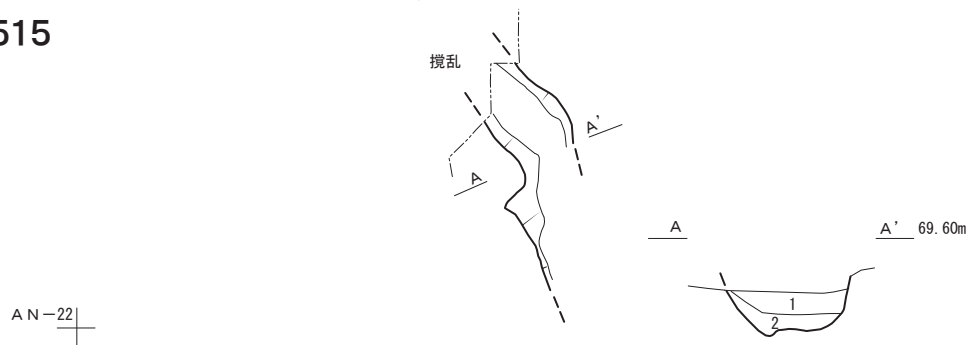
SZ1469



SZ1469

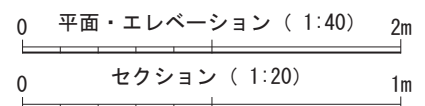
- | | | |
|---|-------------|----------------------------|
| 1 | 10YR17/1 黒色 | 礫少量混入。締まり、粘性有り。 |
| 2 | 10YR17/1 黒色 | パミス(φ1~2mm)微量混入。締まり有り。粘性弱。 |
| 3 | 10YR2/2 黒褐色 | ロームブロック少量混入。 |
| 4 | 10YR2/2 黒褐色 | 礫混入。締まり、粘性なし。 |
| 5 | 10YR2/1 黒色 | ローム粒少量混入。締まり有り。粘性弱。 |

SZ1515



SZ1515

- | | | |
|---|-------------|--------------------------|
| 1 | 10YR17/1 黒色 | シルト質。ローム粒微量混入。締まりよし。粘性弱。 |
| 2 | 10YR2/1 黒色 | シルト質。ローム粒少量混入。締まり有り。粘性弱。 |



第20図 円形周溝1469・1515

5 遺 物

発掘区からは、いわゆる焼き物の陶磁器・土器片159点のほか、石製品・礫5点、金属製品3点、鉄滓2点、木製品1点の総計171点の遺物が出土した。第22図に主だった遺物を示した。

(1) 陶磁器・土器

発掘区出土の陶磁器・土器は国産のものである。中世のものは瀬戸・美濃焼の灰釉丸皿の小破片1点あるだけで、ほかは近世以降のものである。肥前・肥前系陶磁器、瀬戸・美濃焼、京・信楽系のほか、土師質土器がある。肥前産磁器はIV期の資料が多い。以下、種別毎に述べる。

第22図1～8は磁器で、染付と白磁がある。1～3は染付の碗で1・2は丸形。いずれも肥前産でIV期。4～6は皿。4は白磁の稜皿形で型打成形。肥前（有田）産でIV期。5・6は瀬戸産の小皿で、19世紀中頃。7は染付の瓶の体部で辣韭形、8は染付の猪口で桶形。いずれも肥前産でIV期。

第22図9～17は陶器。9は碗の口縁部。胎土は灰黄色を呈し、漆継ぎされている。肥前産でIV期か。10は杉形に近い碗で、底部外面に「安」の墨書がある。京・信楽系で19世紀。11は皿か鉢の口縁～体部。肥前産かとみられ、時期は17世紀後半～18世紀。12は搦鉢の底部。胎土は灰黄色を呈し、内外面に黒褐色の鉄釉がかかる。福岡産かとみられ、時期は江戸後期頃。13は小壺の体～底部。胎土は橙色を呈する。福岡産で18世紀頃か。14は壺または甕の体部。肥前産で18世紀。15は瓶と考えられ、胎土は明赤褐色を呈し、焼成不良である。肥前産でIV期。16は土鍋の底部。京・信楽系で18世紀～19世紀中葉頃。17は土鍋蓋。京・信楽系で在地の可能性ある。時期は19世紀。

第22図18・19は土器。18は七厘部品のさな。円盤形で火を受けている。19は土師質土器で、火消し壺蓋とみられ³⁾、ロクロ成形である。内面に炭素が吸着し、黒色を呈する。

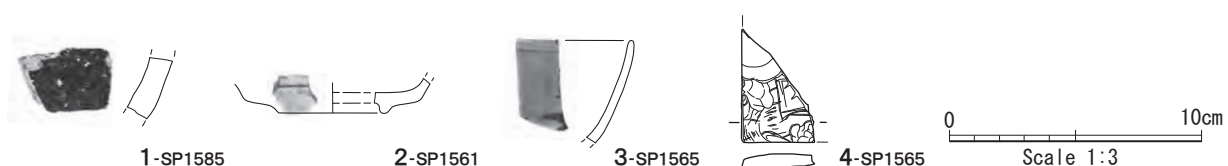
(2) その他の遺物

石製品・金属製品・鉄関連遺物・木製品

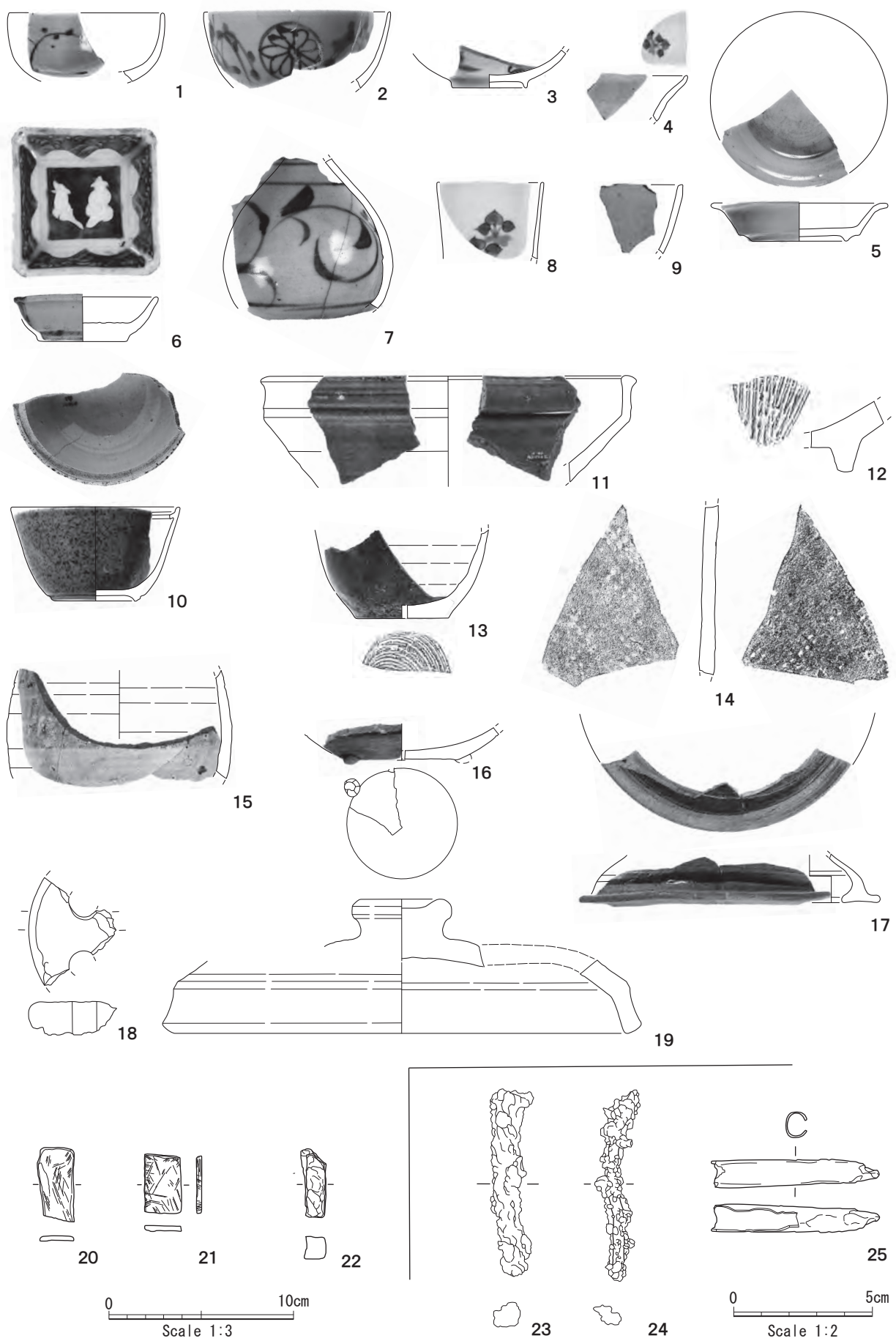
石製品には7類の砥石（第22図20・21）が得られているほか、火打石とみられるもの（22）がある。鉄製品（第22図23・24）はいずれも棒状で器種不明である。このほか鉄関連遺物として鉄滓が2点得られている。図版11-26は鉄塊系遺物とみられる。27は梔形鍛冶滓で含鉄である。銅製品（第22図25）は煙管の吸口で中に羅字が遺存する。木製品（図版11-28）は漆器碗の破片とみられる。

註

- 1) 飯村均氏に実見のうえ、御教示いただいた。
- 2) 一関市教育委員会 二階堂里絵氏に実見のうえ、御教示いただいた。
- 3) 当初は古代の土器と考えたが、近世以降のものではないかと、山形県埋蔵文化財センター 高桑登氏に御教示いただいた。



第21図 柱穴・柱穴様ピット出土遺物



第22図 発掘区出土遺物

第三章 考察

1 遺構の構造

今回の発掘調査は事務所建設に伴うもので、発掘範囲は城のごく一部であり、中世大館城の全容は不明である。このため、発掘区で検出された遺構の機能や変遷過程も的確には判断できない。しかしながら、三ノ丸地区については、ごく一部であるが、平成28年度に発掘調査を実施し、竪穴建物跡の存在も確認できたことから、発掘区の所見と合わせて、遺構の構造について知見を述べることにする。

発掘区内で検出された遺構は竪穴建物跡5軒・井戸跡1基・溝跡2条のほかに、土坑・円形周溝・柱穴などである。竪穴建物跡は発掘区西端にある河川跡（オボコ沢）に平行して間隔を置いて分布する。これらの建物跡は長径3m以下の小規模なものである。このうち張り出し部をもつものは竪穴建物跡1511と1512で、張り出し部は出入口として利用されたと思われる。竪穴建物跡1510については南側が大きく攪乱されているため、全体の様相は不明であるものの、竪穴建物跡1510・1511・1512はいずれも床面から礫がまとまって出土しているという共通性があり、同時期の建物跡と思われる。一方、竪穴建物跡1455と1513は南東－北西方向に長軸があり、東壁に張り出し部をもたず、建て替えがなされるという共通性があり、同時期の可能性がある。中世の竪穴建物跡の性格については、八戸市根城跡等の調査成果から「工房」や「納屋」として使われたと考えられている（大野2001）。本遺跡の建物跡は、炉などを伴わないことから、納屋として利用されたと思われる。同様の遺構は平成28年度の発掘調査区においても1軒のみ検出されている。両調査区は100mほど離れている（第4図）ため、三ノ丸地区には調査区外にも数多く分布していた可能性が考えられ、城の物資を保管しておく建物群が存在していたかもしれない。なお、井戸は1基のみで、竪穴建物跡に先行する。このことから今回の調査区は中世大館城の居住域ではないことを示唆していると思われる。井戸跡1450は出土土器から13世紀後半に位置付けられる。井戸跡の周辺を精査したが、当該期の遺構・遺物は検出されなかった。少なくとも井戸の存在から周辺に居館があると考えられ、16世紀後半に浅利勝頼が城を築く前から、本地区においても当城跡が利用されていたことが判明した。

このほか円形周溝と考えられる遺構が2基検出された。片貝家ノ下遺跡では秋田県埋蔵文化財センターが実施したレーダー探査により、9世紀末～10世紀初頭の墳墓とみられる遺構の存在が確認されている（秋田県埋蔵文化財センター編2019）が、市内で発掘調査されたものとしては、初めての事例である。周溝内からは火山灰層や遺物は検出されなかったため、構築された年代については不明であるが、S Z 1469は平面形が馬蹄形をなし、南東部が開口するという特徴から、平安時代の遺構と考えたい。

近世の遺構は土坑や柱穴様ピットが検出されたが、建物跡としては復元できなかった。三ノ丸に居住した給人の屋敷地の裏手にあたり、居住域にはあたらないのであろう（別図）。

2 遺物と城の年代

中世の陶磁器類の編年研究は、各分野でかなり進んでいる。中世大館城についての文献資料がほとんどない現在、出土陶磁器類はその年代を考える際の大きなよりどころである。

16世紀後半～17世紀初頭の中国製染付磁器についての分類・編年案（鈴木1991、上田1991、森

1992)を参考にして、当城跡出土品をみよう。鈴木(1991)によれば16世紀後半から17世紀初頭は石山本願寺期(～1580)、豊臣前期(1580～1598)、豊臣後期(1598～1615)に分けられており、当城跡の出土品はおおむね石山本願寺期・豊臣前期に比定される。石山本願寺期末から粗製陶質の皿が少量含まれ、豊臣前期には多量に出土するようになるという。当城跡出土の中国磁器は染付のみで、1点が景德鎮窯系、ほかは漳州窯系の粗製陶質の皿であり、豊臣後期の典型例はみられない。

次に瀬戸・美濃焼をみよう。天目茶碗(第10図1)は大窯段階に比定される。腰折皿(第8図1)は古瀬戸後IV期新段階に登場する器種であり、15世紀後葉に比定される(藤澤1991)。灰釉丸皿は見込みに菊花文のスタンプが押印されるもので、大窯第2段階(藤澤1993)に比定される。内禿皿はこれよりも新しい大窯第3～第4段階(藤澤1993)に比定される。

これら陶磁器類のほか、土師器皿は2点のみであるが、手づくねの可能性のあるものとロクロ成形で糸切の二種が存在する。これらは胎土のちがいなどからも系譜の異なるもので、両者が併存していたと考えられる。前者は東北地方で平安末期に在地の糸切のタイプに加わり、鎌倉時代に至るまで存在するものである(東北中世考古学会編2003)。この系譜の出自は畿内に求められる。大館市内の中世の手づくね土器は、矢立廃寺跡(大館市教育委員会1987)と土飛山館跡(大館郷土博物館編2009)から出土している。当城跡出土の手づくねの可能性のある土器は、両遺跡の土器に比べて、成形時のナデが強いためか、薄いつくりとなっている。一方、ロクロ成形は中世を通じてみられ、古代末期以来の在地の系譜下でとらえられる。当城跡出土のロクロ小皿は1点のみであるが、矢立廃寺跡出土小皿に胎土や形態等がよく似ている。

さて、土師器は一般に在地で製作されたと考えられ、形態や手法などの特徴を離れた地域間での比較・対照が可能かどうかは検討を要するが、手づくねタイプの形態や手法は鎌倉のものと共通していることが注目される。当城跡出土土器は法量が縮小化する段階で、大倉幕府周辺遺跡の遺構5375や5262出土土器に類似し、13世紀中葉～後半の幅のなかでとらえられよう¹⁾。

なお、近世陶磁器については比較的出土量が少ないが、17世紀～18世紀代の肥前磁器や19世紀の瀬戸産磁器が得られている。

以上、陶磁器類の年代観を概観したが、一部をのぞき遺構出土のものは15・16世紀のなかにおさまる。これより、当城跡の遺構の造営年代は15世紀後葉に求められ、16世紀まで継続して営まれていたことが類推される。これ以上に細かな年代を考定することはむずかしい。他方、竪穴建物跡の廃絶の年代は当時の情勢を勘案すると、浅利勝頼が殺害された天正10年(1582)または11年(1583)、浅利頼平が急死した慶長3年(1598年)を下限とみることができよう。なお、中国製陶磁器と瀬戸・美濃焼はともに少ないが、豊臣後期に特徴的な志野焼や唐津焼がみられないことを重視すれば、浅利氏滅亡の時期に廃絶した可能性もあろう。

3 中世大館城跡の性格と歴史的背景

大館城跡が造営された15世紀後葉以降の城周辺の状況は、ほとんど分かっていない。当城跡の造営主体はこの周辺に基盤をおいた武士であり、在地領主であると考えられる。この周辺の在地領主層の分布は永正年間以降の十狐城主浅利則頼以外はほとんど不明である。浅利氏一族以外の館跡の存在から、それに伴う在地領主層の存在もうかがえる。いまこれらについて知る手がかりはなく、浅利則頼入部以前の大館城の造営主体はわからない。

城館は日常生活の住まいであり、当城跡で検出された遺構・遺物はそれを物語っている。しかしな

がら、この城の場合、長木川に臨む段丘縁辺を選地しており、そこがただ単なる日常生活の場ではなく、ほかになんらかの機能をもった施設と考えられる。

大館市周辺の居館には片山館遺跡・土飛山館など大館城と共通した立地条件をもつものがいくつか存在する（第Ⅰ章2(3)3）。これらの造営期は13世紀から14世紀の時期にかけて存在したことがわかっている。当城跡はこれらの館より時期が下るものの、このような立地には軍事的な機能を考慮して造営されたものといえよう。すなわち、住まいであるとともに経済的・軍事的な機能がその一面にあるのである。大館城についていえば、城は一方では城主がその土地を支配する拠点であり、他方では浅利氏の領地支配のなかで一定の役割を担っていたことを示唆するであろう。

以上のように、大館城跡は室町時代から戦国期の時代背景のなかで生まれた一種の経済的・軍事的拠点である。これまで、中世城館の調査も増加しつつあるとはいえ、多くは15世紀後半以降の戦国期の例であり、中世前期のいわゆる武士の館は調査例が少なく、実態はあまりよくわかっていない。近年、大館城の本丸と二ノ丸地区では大館市本庁舎建設事業に伴う発掘調査が継続して実施された。令和4年度の調査では二ノ丸調査区南西部隅（第4図）から江戸時代に先行する堀跡と大溝が検出され、堀跡からは12世紀後半～13世紀前半頃の須恵器系陶器体部片が1点だけ得られた（未報告）。今回の井戸跡と合わせて考慮すると、大館城築城以前から在地領主の居館が存在したことが推測される。

4. 結語

これまで3章にわたって調査成果を述べてきたが、最後にその要点を列挙しておく。

- (1) 大館城跡は大館盆地中央部の大館市字三ノ丸87番1他に所在する。調査地は長木川に面した比高約10mの段丘崖がわずかに半島状に突き出した部分、標高約70mに立地し、大館盆地北部から津軽との境の山々を一望できる。
- (2) 当城跡は昭和53～55年に秋田県教育委員会が実施した中世城館遺跡詳細分布調査で、遺跡として登載されたものである。今回の調査区はこのうち「三ノ丸」地区にあたる。
- (3) 発掘調査は秋田県信用保証協会大館支所建設に伴うもので、その建築部分東西25m、南北約13m、面積約300㎡を調査した。この部分は城全体からみれば西側にあたる。
- (4) 発掘区内では竪穴建物跡5軒、柵跡1条、井戸跡1基、土坑数基、溝跡2条、円形周溝2基、柱穴様ピット多数が検出された。竪穴建物跡は炉跡などを伴わず、納屋等の建物と考えられる。井戸跡は竪穴建物跡と重複して存在し、建物跡に先行する。円形周溝とみられる遺構が2基確認されたが、市内では初めての発見例となる。
- (5) 三ノ丸地区では平成28年度に発掘調査を実施しており、竪穴建物跡が検出されている。今回の発掘区とその調査区の約100mに渡って建物跡が分布していたと考えられる。
- (6) 出土遺物は陶磁器類・石製品・金属製品などである。陶磁器類には中国製陶磁器（染付）、瀬戸・美濃焼（天目・灰釉皿・染付）、肥前陶磁器（染付・碗・壺・瓶・甕）、土師器（皿・七厘・鍋）、京・信楽系（碗・土鍋・土鍋蓋）のほか、産地不明のものが若干ある。これらは13世紀前半から19世紀のものであるが、城が造営された時期は15世紀後葉以降と考えられる。

土師器皿は主体的なあり方をしていないが、鎌倉との関係が注目される。

- (7) 当城跡は室町後期から戦国期の緊張した社会情勢を背景に出現したものであり、生活の場であるとともに、一定の軍事的・経済的な機能をもつものと推定される。当城跡の造営時におけるごく周

辺の状況は不明であるが、中世以来の在地領主層の存在も考えられることから、当城が造営される前から居館が存在し、当城は軍事・交通上の有利な立地条件を生かして、山城などと同様の機能を兼ねるものとして造営されたことがうかがえる。

註

1) 当城跡出土の土師器皿は飯村均氏に実見のうえ、編年の位置をご教示いただいた。

引用・参考文献

- 秋田県農政部農地整備課 1986 『土地分類基本調査 大館』
- 秋田県教育委員会 1979 『塚の下遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第61集
- 秋田県教育委員会 1981 『秋田県の中世城館』秋田県文化財調査報告書第86集
- 秋田県教育委員会 2006 『秋田県遺跡地図（北秋田地区版）』
- 秋田県埋蔵文化財センター編 1990 『諏訪台C遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第196集 秋田県教育委員会
- 秋田県埋蔵文化財センター編 1992 『国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財調査報告書V』秋田県文化財調査報告書第221集 秋田県教育委員会
- 秋田県埋蔵文化財センター編 1997 『池内遺跡 遺構篇』秋田県文化財調査報告書第268集 秋田県教育委員会
- 秋田県埋蔵文化財センター編 2005 『狼穴IV遺跡』秋田県文化財調査報告書第391集 秋田県教育委員会
- 秋田県埋蔵文化財センター編 2007 『土飛山館跡』秋田県文化財調査報告書第425集 秋田県教育委員会
- 秋田県埋蔵文化財センター編 2008 a 『釈迦内中台 I 遺跡』秋田県文化財調査報告書第426集 秋田県教育委員会
- 秋田県埋蔵文化財センター編 2008 b 『狼穴III遺跡』秋田県文化財調査報告書第427集 秋田県教育委員会
- 秋田県埋蔵文化財センター編 2009 『坂下II遺跡』秋田県文化財調査報告書第444集 秋田県教育委員会
- 秋田県埋蔵文化財センター編 2010 『狼穴II遺跡』秋田県文化財調査報告書第460集 秋田県教育委員会
- 秋田県埋蔵文化財センター編 2019 「第2節 遺跡確認調査 6 大館工業団地開発事業」『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第515集 秋田県教育委員会
- 秋田県埋蔵文化財センター編 2024 『久保田城跡』秋田県文化財調査報告書第532集 秋田県教育委員会
- 板橋範芳 2004 『『沙弥浄光譲状』の分析』『大館郷土博物館研究紀要 火内』5 大館郷土博物館
- 板橋範芳・田山久 1979 「第5章 中世の大館地方」『大館市史 第1巻』大館市
- 伊藤武士 2008 「第四章 検出遺構と出土遺物」『秋田城跡II - 鶴ノ木地区 -』秋田市教育委員会 秋田城跡調査事務所
- 上田秀夫 1991 「16世紀末～17世紀前半における中国製染付碗・皿の分類と編年の予察」『関西近世考古学研究』I 関西近世考古学研究会
- 宇田川浩一 2005 「元慶の乱前後の集落と生業 - 米代川流域と旧八郎湖東北岸の違い -」『第31回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』古代城柵官衙遺跡検討会
- 大館郷土博物館編 2009 『土飛山館跡発掘調査報告書』大館市文化財調査報告書第3集 大館市教育委員会
- 大館郷土博物館編 2013 『扇田道下遺跡発掘調査報告書』大館市文化財調査報告書第8集 大館市教育委員会
- 大館市教育委員会 1986 『大館市玉林寺跡発掘調査報告書』
- 大館市教育委員会 1987 『大館市矢立廃寺跡発掘調査報告書』
- 大館市教育委員会 1990 a 『大館市遺跡詳細分布調査報告書』

- 大館市教育委員会 1990b 『大館市山王台遺跡発掘調査報告書』
- 大館市教育委員会 2019 『大館城跡発掘調査報告書』大館市文化財調査報告書第16集
- 大館市教育委員会 2020 『土飛山館跡発掘調査報告書(2)』大館市文化財調査報告書第17集
- 大館市教育委員会郷土博物館編 2014 『川口十三森遺跡発掘調査報告書』大館市文化財調査報告書第11集
- 大野亨 2001 「堅穴建物跡とは何かー八戸市根城跡を中心にー」『掘立と堅穴 中世遺構論の課題』東北中世考古学
叢書 東北中世考古学会
- 大橋康二 1989 『肥前陶磁』ニューサイエンス社
- 奥山潤 1971 『北秋田郡田代町山田字柏木岱 縄文期堅穴群 続縄文期配石土坑』大館市史編さん調査資料第2集
大館市史編さん委員会
- 奥山潤・板橋範芳 1973 『大館市片山「館コ」発掘調査報告書』大館市史編さん調査資料第5集 大館市史編さん委
員会
- 奥山潤・板橋範芳 1974 『大館市片山「館コ」発掘調査報告書』大館市史編さん調査資料第13集 大館市史編さん委
員会
- 九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年』
- 櫻田隆・利部修 1997 「秋田県の貿易陶磁器」『貿易陶磁研究集会 平泉大会資料集 東北の貿易陶磁』日本貿易陶
磁研究会
- 塩谷順耳 1962 「第4編 中世の秋田」『秋田県史 第1巻』
- 新宿区内藤町遺跡調査会編 1992 『東京都新宿区 内藤町遺跡』東京都建設局 新宿区内藤町遺跡調査会
- 鈴木秀典 1991 「大坂城跡の豊臣前期と豊臣後期」『関西近世考古学研究』I 関西近世考古学研究会
- 續伸一郎 1995 「中世後期の貿易陶磁器」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 東北中世考古学会編 2003 『中世奥羽の土器・陶磁器』高志書院
- 新潟県教育委員会 1986 『上新バイパス関係遺跡発掘調査報告書Ⅱ 新井市坪ノ内館跡』新潟県埋蔵文化財調査報告
書第44集
- 藤澤良祐 1991 「瀬戸古窯址群Ⅱー古瀬戸後期様式の編年ー」『瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要』X
- 藤澤良祐 1993 『瀬戸市史 陶磁史編 4』瀬戸市
- 森 毅 1992 「16世紀後半から17世紀初頭の陶磁器」『難波宮址の研究』第9 財団法人大阪市文化財協会

第6表 竪穴建物跡一覧

遺構 番号	位 置	平面形	規 模			長軸 方向 N→E	時期	備 考
			確認面(m)	底面(m)	深さ(m)			
S I 1455	AO-22・23	隅丸方形	3.70 × 2.98	3.38 × 2.80	0.34	134°	15世紀後葉～	S E 1450→S I 1455
P1	AO-23 a	円	0.33 × 0.27	0.16 × 0.13	0.34			S I 1455内柱穴
P2	AO-23 a	隅丸五角形	0.33 × 0.26	0.26 × 0.16	0.69			
P3	AO-23 a	円	0.26 × -	0.13 × -	0.47			P3→P4
P4	AO-23 a	長円	0.35 × 0.29	0.20 × 0.19	0.52			
P5	AO-22 b	円	0.26 × 0.23	0.20 × 0.16	0.48			
P6	AO-22 b	隅丸方形	0.25 × 0.25	0.19 × 0.14	0.27			
P7	AO-23 a	隅丸方形	0.34 × 0.31	0.30 × 0.19	0.77			
P8	AO-23 d	長円	0.30 × 0.20	0.18 × 0.14	0.46			
P9	AO-23 a	-	-	-	-			P9→P7
P10	AO-23 d	隅丸方形	0.22	0.13 × 0.12	0.35			
P11	AO-23 a	円	0.17 × 0.13	0.11 × 0.10	0.26			
P12	AO-22・23	円	0.23 × 0.22	0.15 × 0.13	0.28			
S I 1510	AM・N-22	-	3.04 × -	2.80 × -	0.31	55°		
P1	AM-22 d	円	0.33 × 0.21	0.13 × 0.11	0.30			S I 1510内柱穴
P2	AM-22 d	隅丸方形	0.23 × -	0.11 × -	0.30			
P3	AN-22 a	隅丸方形	0.28 × 0.26	0.16 × 0.11	0.73			
P4	AN-22 a	隅丸方形	0.24 × 0.23	0.14 × 0.13	0.39			
P5	AN-22 a	円	0.22 × 0.20	0.10	0.32			
S I 1511	AM・N-23	-	2.85 × 2.14	2.75 × 2.14	0.36	55°	16世紀中葉～後葉	
P1	AN-23 a	隅丸方形	0.24 × 0.22	0.13 × 0.09	0.35			S I 1511内柱穴
P2	AN-23 a	円	0.23 × 0.22	0.19 × 0.07	0.19			
P3	AN-23 a	隅丸方形	0.25 × 0.23	0.15 × 0.08	0.37			
P4	AN-23 a	隅丸方形	0.32 × 0.17	0.16 × 0.11	0.25			
P5	AN-23 a	隅丸方形	0.22 × 0.20	0.14 × 0.05	0.49			
S I 1512	AN-22	隅丸方形	4.30 × 3.62	3.65 × 3.42	0.26	125°		
P1	AN-22 b	長円	0.21 × -	0.13 × 0.12	0.37			S I 1512内柱穴
P2	AN-22 b	隅丸方形	0.34 × 0.33	0.15 × 0.13	0.72			
P3	AN-22 c	不整	0.26 × 0.24	0.11 × 0.09	0.54			
P4	AN-22 c	隅丸方形	0.28 × 0.21	0.12 × 0.10	0.42			
P5	AN-22 c	円	0.25 × 0.23	0.13 × 0.08	0.35			
P6	AN-22 c	円	0.48 × 0.43	0.17 × 0.13	0.67			
P7	AN-22 d	隅丸方形	0.34 × 0.30	0.20 × 0.18	0.40			
P8	AN-22 b	長円	0.26 × 0.20	0.12	0.54			
S I 1513	AM・N-22	隅丸方形	2.94 × 2.40	- × 2.05	0.17	119°	～18世紀後半	
P1	AM-22 c	円	0.20	0.13×0.08	0.15			S I 1513内柱穴
P2	AM-22 c	隅丸方形	0.16	0.12×0.09	0.22			
P3	AM-22 c	長円	0.21 × 0.17	0.08×0.07	0.24			
P4	AM-22 c	隅丸方形	0.24 × 0.20	0.15×0.14	0.29			
P5	AM-22 c	長円	0.31 × 0.25	0.14	0.30			
P6	AM-22 c	円	0.23 × -	0.16 × -	0.58			
P7	AM-22 c	円	0.22 × 0.21	0.11	0.27			
P8	AM-22 c	長円	0.18 × 0.15	0.08 × 0.07	0.32			
P9	AM-22 c	長円	0.20 - 0.13	0.10 - 0.06	0.22			

第7表 柵跡一覧

遺構 番号	位 置	平面形	規 模			長軸方向 N→E	時期	備 考
			確認面(m)	底面(m)	深さ(m)			
S A 1485	A O-22	—	4.16 × —	—	—	43°		
S P 1482	A O-22 c・d	不整	0.34 × 0.29	0.23 × 0.19	0.09			
S P 1483	A O-22 b	円	0.25	0.15 × 0.13	0.16			
S P 1484	A O-22 b	円	0.26 × 0.22	0.17 × 0.14	0.15			

第8表 井戸跡一覧

遺構 番号	位 置	平面形	規 模			長軸方向 N→E	時期	備 考
			確認面(m)	底面(m)	深さ(m)			
S E 1450	A O-23	円	1.05	1.65 × 1.6	2.00		13世紀後半	S E 1450→S I 1455

第9表 溝跡一覧

遺構 番号	位 置	平面形	規 模			長軸方向 N→E	時期	備 考
			確認面(m)	底面(m)	深さ(m)			
S D 1470	A O-22 b		0.35 × 0.43	0.35 × 0.10	0.19	17°		
S D 1514	A M-22		2.75 × 0.3	2.75 × 0.15	0.06	26°	中世以前	S D 1514→S I 1510

第10表 土坑一覧

遺構 番号	位 置	平面形	規 模			長軸方向 N→E	時期	備 考
			確認面(m)	底面(m)	深さ(m)			
S K 1451	A O-23	—	—	—	1.11		18世紀前半～ 近代の可能性	
S K 1454	A P-23 a	—	—	—	0.56			
S K 1459	A N-22 d	円	0.67 × 0.63	0.50 × 0.35	0.14	132°		
S K 1460	A O-22 a	円	0.90 × 0.53	0.77 × 0.43	0.13	114°		
S K 1501	A O-22 a	溝	1.30 × 0.45	0.95 × 0.25	0.24	99°		S X 1504と重複

第11表 円形周溝一覧

遺構 番号	位 置	平面形	長径(m)	短径(m)	周溝規模(m)					長軸方向 N→E	時期	備 考
					確認面 最大	確認面 最小	底面 最大	底面 最小	深さ			
S Z 1469	A O-22	馬蹄	4.5	—	0.47	0.24	0.35	0.07	0.15			S I 1455と重複、 S Z 1469→S P 1483
S Z 1515	A M-22	—	—	—	0.35	0.32	0.32	0.17	0.10			

第12表 柱穴・柱穴様ピット一覧

遺構 番号	位 置	平面形	規 模		埋 土	柱痕跡	備 考
			確認面(m)	深さ(m)			
S P 1457	A O-23 d	—	0.36 × —	0.18	10YR2/1		北壁セクション S P 1466→SP1465 段下げで完掘
S P 1461	A P-23 a	隅丸三角形	0.20 × 0.17	0.13	10YR2/1		
S P 1462	A P-23 a	—	0.27 × —	0.31	10YR2/1		
S P 1463	A P-23 a	長円	0.21 × 0.16	0.03	10YR2/1		
S P 1464	A O-22 c	—	0.39 × 0.30	0.10	10YR2/1		
S P 1465	A O-22 c	円	0.25 × 0.20	0.05	10YR2/1		
S P 1466	A O-22 c	長円	0.61 × 0.46	0.20	10YR1.7/1		
S P 1467	A O-22 c	円	0.26 × 0.23	0.06	10YR1.7/1		
S P 1468	A O-22 c	—	— × —	0.12	10YR1.7/1		
S P 1471	A N-22 c	円	0.20	0.13	10YR2/1		
S P 1472	A O-22 a	方	0.09	0.06	10YR1.7/1		
S P 1473	A O-22 a	長円	0.14 × 0.12	0.09	10YR1.7/1		
S P 1474	A O-22 a	隅丸六角形	0.18 × 0.17	0.04	黒色土		
S P 1475	A O-22 a	不整円	0.22 × 0.21	0.13	10YR1.7/1		

遺構 番号	位 置	平面形	規 模		埋 土	柱痕跡	備 考
			確認面(m)	深さ(m)			
S P 1476	A O - 22 a	長円	0.15 × 0.14	0.06	10YR1.7/1		
S P 1477	A O - 22 a	不整	0.26 × 0.21	0.20	10YR1.7/1		
S P 1478	A O - 22 a	円	0.22 × 0.17	0.09	10YR3/2		
S P 1479	A O - 22 a	長円	0.29 × 0.27	0.19	10YR1.7/1		
S P 1480	A O - 22 a	円	0.28 × 0.27	0.24	10YR1.7/1		
S P 1486	A N - 22 d	隅丸方形	0.20 × 0.14	0.33	10YR2/1		S P 1491→SP1486
S P 1487	A N - 22 c	円	0.21 × 0.19	0.23	10YR1.7/1		
S P 1488	A O - 22 b	円	0.19 × 0.16	0.02	—		段下げて完掘
S P 1489	A O - 23 a ・ d	隅丸方形	0.23	0.23	10YR1.7/1		
S P 1490	A O - 22 b	長円	0.35 × 0.25	0.09			
S P 1491	A N - 22 d	円	0.28 × 0.27	0.20	10YR1.7/1		S P 1491→SP1486
S P 1492	A N - 22 c	隅丸方形	0.24 × 0.18	0.14	10YR1.7/1		
S P 1493	A O - 22 d	円	0.17	0.20	10YR1.7/1		
S P 1494	A O - 22 b	円	0.19 × 0.17	0.06	10YR1.7/1		
S P 1495	A O - 22 b	円	0.41 × 0.35	0.02	—		段下げて完掘
S P 1496	A O - 23 d	円	0.19 × 0.18	0.08	10YR4/3	有り	
S P 1497	A O - 23 d	円	0.22 × 0.14	0.05	10YR1.7/1	有り	
S P 1498	A O - 23 d	—	0.40 × —	0.14	10YR2/1		S P 1457と重複
S P 1499	A O - 22 b	長円	0.53 × 0.34	0.10	10YR1.7/1		
S P 1500	A O - 22 a	不整円	0.20 × 0.17	0.13	10YR1.7/1		
S P 1502	A O - 22 a	円	0.29 × 0.25	0.19	10YR1.7/1		
S P 1503	A N - 22 d	不整	0.24 × 0.19	0.08	10YR1.7/1		
S P 1505	A O - 22 a	—	0.28 × —	0.52	10YR1.7/1		I 層からの掘り込み
S P 1506	A O - 22 b	円	0.11 × 0.10	0.15	10YR2/1		杭穴、下端尖る
S P 1507	A O - 22 b	円	0.16	0.33	10YR2/3		
S P 1508	A O - 22 a	円	0.14 × 0.13	0.06	10YR1.7/1		
S P 1509	A O - 22 a	長円	0.13 × 0.11	0.05	10YR1.7/1		
S P 1516	A N - 22 b	円	0.19 × 0.18	0.16	10YR1.7/1		S I 1512 P 1 → S P 1516
S P 1517	A N - 22 b	円	0.19	0.03	10YR2/1		
S P 1518	A N - 22 b	円	0.33 × 0.30	0.12	10YR1.7/1		
S P 1519	A M - 22 c	円	0.33 × 0.32	0.37	10YR2/1	有り	SI1513完掘後に検出
S P 1520	A M - 22 c	円	0.29 × 0.27	0.21	10YR2/1		
S P 1521	A M - 22 c	—	—	0.16	10YR2/1		
S P 1522	A M - 22 c	円	0.21 × 0.20	0.13	10YR2/2		
S P 1523	A M - 22 c	—	0.30 × 0.25	0.25	10YR1.7/1		攪乱に変更
S P 1524	A M - 22 c ・ 23 d	長円	0.24 × 0.20	0.05	10YR2/2		
S P 1525	A M - 22 c	円	0.34 × —	0.17	10YR2/1		S P 1525→S P 1569
S P 1526	A M - 22 ・ 23	隅丸方形	0.14 × —	0.11			S P 1526→S P 1569
S P 1527	A M - 23 d	長円	0.40 × 0.27	0.17	10YR1.7/1		S P 1567→S P 1527
S P 1528	A M - 23 d	長円	0.25 × 0.18	0.16	10YR2/2		
S P 1529	A M - 23 d	円	—	0.03	—		段下げて完掘
S P 1530	A M - 23 d	—	0.22 × 0.20	0.19	10YR2/1		
S P 1531	A M - 23 d	—	—	0.20	10YR2/1		
S P 1532	A M - 23 d	—	—	0.25	10YR2/3		
S P 1533	A M - 23 d	—	0.24 × 0.19	0.15	10YR2/1		
S P 1534	A M - 23 d	隅丸方形	0.31 × 0.27	0.41		有り	
S P 1535	A M - 23 d	長円	0.29 × 0.27	0.15	10YR2/3		
S P 1536	A M - 23 d	不整円	0.35 × 0.30	0.15	10YR2/1		

遺構 番号	位 置	平面形	規 模		埋 土	柱痕跡	備 考
			確認面(m)	深さ(m)			
S P 1537	A M-23 d	円	0.31 × 0.30	0.34			S P 1537→S P 1572
S P 1538	A M-23 d	円	0.46 × 0.37	0.26	10YR2/2		
S P 1539	A N-23 a	隅丸五角形	0.22 × 0.21	0.48	10YR1.7/1		
S P 1540	A N-22 a	隅丸方形	0.40 × 0.25	0.06	10YR2/1		
S P 1542	A N-22 a	円	0.16	0.05	10YR1.7/1		
S P 1543	A N-22 a	長円	0.20 × 0.17	0.07	10YR3/1		S P 1544→S P 1543
S P 1544	A N-22 a	隅丸方形	0.32 × 0.27	0.07	10YR2/1	有り	
S P 1545	A N-22 a・b	円	0.54 × -	0.16	10YR1.7/1		S P 1545→S P 1549
S P 1546	A N-22 a	隅丸方形	0.30 × 0.24	0.15	10YR1.7/1		
S P 1547	A N-23 a	隅丸方形	0.27 × 0.25	0.18	10YR2/1		
S P 1548	A M-23 d	円	0.18 × 0.17	0.08	10YR2/2		
S P 1549	A N-22 b	円	0.33	0.24	10YR2/1		S P 1545→S P 1549
S P 1550	A N-22 b	円	0.15 × 0.14	0.04	10YR3/2		
S P 1551	A N-22 b	円	0.20 × 0.19	0.09	10YR1.7/1		
S P 1552	A N-22 a	隅丸方形	0.22 × 0.20	0.08	10YR1.7/1		
S P 1553	A N-22 b	隅丸六角形	0.22 × 0.20	0.12	10YR1.7/1		
S P 1554	A N-22 b	隅丸方形	0.26 × 0.22	0.07	10YR1.7/1		
S P 1555	A N-22 a	隅丸方形	0.29 × 0.24	0.17	10YR2/1		
S P 1556	A N-22 a	隅丸五角形	0.30 × 0.24	0.20	10YR1.7/1		
S P 1557	A N-23 a	不整	0.29 × -	0.30	10YR2/2		S I 1511と重複
S P 1558	A N-22 b	長円	0.37 × 0.29	0.12	10YR1.7/1		
S P 1559	A N-22 b	円	0.23 × 0.21	0.37	10YR3/3	有り	
S P 1561	A N-22 b	円	0.23	0.20	10YR1.7/1	有り	S I 1512と重複、炭化物混入
S P 1562	A N-23 a	不整円	0.25 × 0.22	0.07	10YR2/2		
S P 1563	A N-23 a	円	0.26 × 0.24	0.07	10YR2/1		
S P 1564	A N-23 a	長円	0.29 × 0.24	0.15	10YR2/1		S P 1566→S P 1564
S P 1565	A N-23 a	隅丸五角形	0.35 × 0.26	0.26	10YR2/1		S P 1566→S P 1565
S P 1566	A N-23 a	不整	0.40 × 0.39	0.08	10YR1.7/1		
S P 1567	A M-23 d	円	0.28 × 0.24	0.18	10YR1.7/1		S P 1567→S P 1527
S P 1569	A M-22 c	方形	0.22 × -	0.17	10YR2/2		S P 1525・1526→S P 1569
S P 1570	A N-22 b	円	0.56 × 0.45	0.07	10YR1.7/1	有り	
S P 1571	A N-22 b	方形	0.26 × 0.17	0.29	10YR3/2	有り	
S P 1572	A M-23 d	隅丸方形	0.22 × 0.16	0.27	10YR2/1		S P 1537→S P 1572
S P 1573	A N-23 d	円	0.26 × -	0.05	10YR2/1		
S P 1574	A N-23 a	隅丸方形	0.25 × 0.21	0.17	10YR2/2		
S P 1575	A N-23 a	隅丸方形	0.23 × 0.21	0.09	10YR2/1		
S P 1576	A N-23 a	方形	0.32 × 0.19	0.10	10YR2/1		
S P 1577	A N-23 a	方形	0.22 × 0.19	0.13	10YR2/1		
S P 1578	A N-23 a	円	0.25 × 0.22	0.11	10YR1.7/1		
S P 1579	A M-22 c	円	0.31 × 0.28	0.23	10YR1.7/1		S P 1567→S P 1579
S P 1580	A M-23 d	方形	0.16	0.15	10YR2/2		
S P 1581	A N-22 b	円	0.22	0.07	10YR1.7/1		
S P 1582	A N-22 b・23 a	長円	0.25 × 0.17	0.05	10YR1.7/1		
S P 1583	A N-22 b・23 a	円	0.19 × 0.19	0.07	10YR1.7/1		
S P 1584	A N-22 b	隅丸方形	0.16 × 0.15	0.14	10YR2/1		
S P 1585	A N-22 b	方形	0.24 × 0.17	0.07	-		上面から陶器が出土
S P 1586	A N-23 a	隅丸方形	0.13 × -	0.22	10YR2/1		
S P 1587	A M-22 c	-	0.25 × -	0.21	10YR1.7/1		

第13表 遺構出土遺物一覧

分類 出土位置	P				S	C	W	合計
	8			計	1			
	1.磁器	2.陶器	3.土器		7			
竪穴建物跡（S I）								
1455		1		1				1
1511	8	10	1	19				19
1512	4			4	1			5
1513	2			2				2
小計	14	11	1	26	1			27
井戸跡（S E）								
1450			2	2	2	1	1	6
土坑（S K）								
1451	2		1	3				3
(2023)	10	1		11				11
計	12	1	1	14				14
1454	1			1				1
1459			1	1				1
小計	13	1	2	16				16
柱穴・柱穴様ピット（S P）								
1585		1		1				1
1561	1			1				1
1565	1			1	1			2
小計	2	1		3	1		0	4
合計	29	13	5	47	4	1	1	53

第14表 掲載陶磁器・土器観察表

図番号	遺構・調査区	層位	種別	形態		部位	規格(mm, g)			胎土		成形～焼成の特徴	施釉・文様			製作地	年代	備考
				器種	器形		口径	器高	底径	重量	質		色	露胎範囲	文様・絵付・釉薬			
8-1	SI1455	埋土	陶器	腰折皿	端反形	口～体	120			5	陶	褐灰		内：全面・灰白色灰釉 外：全面・灰白色灰釉	瀬戸美濃	15c・3/3	後瀬戸後IV期新	
10-1	SI1511	床面	〃	中碗	天目形	〃	117			15	〃	灰白	体下	内：黒褐色鉄釉、外：口～体・黒褐色鉄釉、外体下：鉄漿	〃	15～16c		
10-2	〃	〃	染付	小皿	丸形	口一部欠	91	19	52	55	半磁半陶	にぶい黄橙	見込、体部下～高台内	内：口・1重圏線、体・1重圏線、外：口・1重圏線+三角形状幾何学文、体・1重圏線、乳濁釉	中国（漳州窯系）	16c・2/2	鈴木皿G群？	
10-3	〃	〃	陶器	小皿	丸形	口～底	104	25	64	66	陶	灰白	量付	内：全面オリーブ色灰釉、菊花、外：全面オリーブ色灰釉	瀬戸美濃	16c・2/3	大窯第2段階	
10-4	〃	〃	土器？	灯明皿		底				39	土師	にぶい黄橙					転用品、タール状黒色物付着	
10-5	〃	埋土	染付	碗		口～体				6	磁	明灰白		内：口・1重圏線 外：口・1重圏線、三角形状文	中国（漳州窯系）	16c・2/2～ 17c・1/8		
10-6	〃	〃	〃	小皿	端反形	口				2	〃	〃		内：口・花、外：口・草花	中国（景德镇窯系）	16c・8/8～ 17c・1/8	小野皿B2群？類	
10-7	〃	〃	〃	〃	丸形	口～体				3	半磁半陶	灰白	見込	内：口・1重圏線 外：口・1重圏線、列点状	中国（漳州窯系）	16c・2/2	鈴木皿G群？	
10-8	〃	〃	〃	〃	〃	〃	96			4	〃	灰黄	〃	内：口・1重圏線 外：口・1重圏線、波頭文？	〃	〃	〃	
10-9	〃	上層	陶器	小皿	〃	口～底	100	27	58	22	〃	黄灰	量付	内：全・オリーブ色灰釉 外：全・オリーブ色灰釉	瀬戸美濃	16c		
10-10	〃	埋土	〃	〃		底			52	24	陶	淡黄	見込	内：体・オリーブ色灰釉 外：全・オリーブ色灰釉	〃	16c・2/2	大窯第3～4段階	
12-1	SI1512	攪乱	染付	碗		底			42	9	磁	灰白	量付	内：見込・草花？ 外：体・縦縞、高台・2重圏線 外：体・「寿」	肥前系	V(1780～1860)		
13-1	SI1513	1	〃	〃		体				4	〃	〃			肥前	IVの内(1650～1670)		
13-2	〃	埋土	〃	〃		口				4	〃	〃		外：口・2重圏線	肥前	IVの内(1700～1750)		
15-1	SE1450	3	土器	灯明皿	無高台	口	92			2	土師	にぶい黄橙		内外・横ナデ	—	13c・2/2		
15-2	〃	9	〃	小皿	〃	口～底	80	16	62	12	〃	浅黄橙	手づくね成形？ ロクロ成形	内外・回転ナデ、外外面・回転糸切	—	〃		
17-1	SK1451	上層	染付	碗	—	底			46	13	磁	灰黄	内高台・外高台脇際		肥前	IIの内(1640～1650)		
17-2	〃	埋土	〃	〃		体				28	〃	灰白		内：体・1重綱目文 外：体・2重綱目文	肥前	IVの内(1700～1750)		

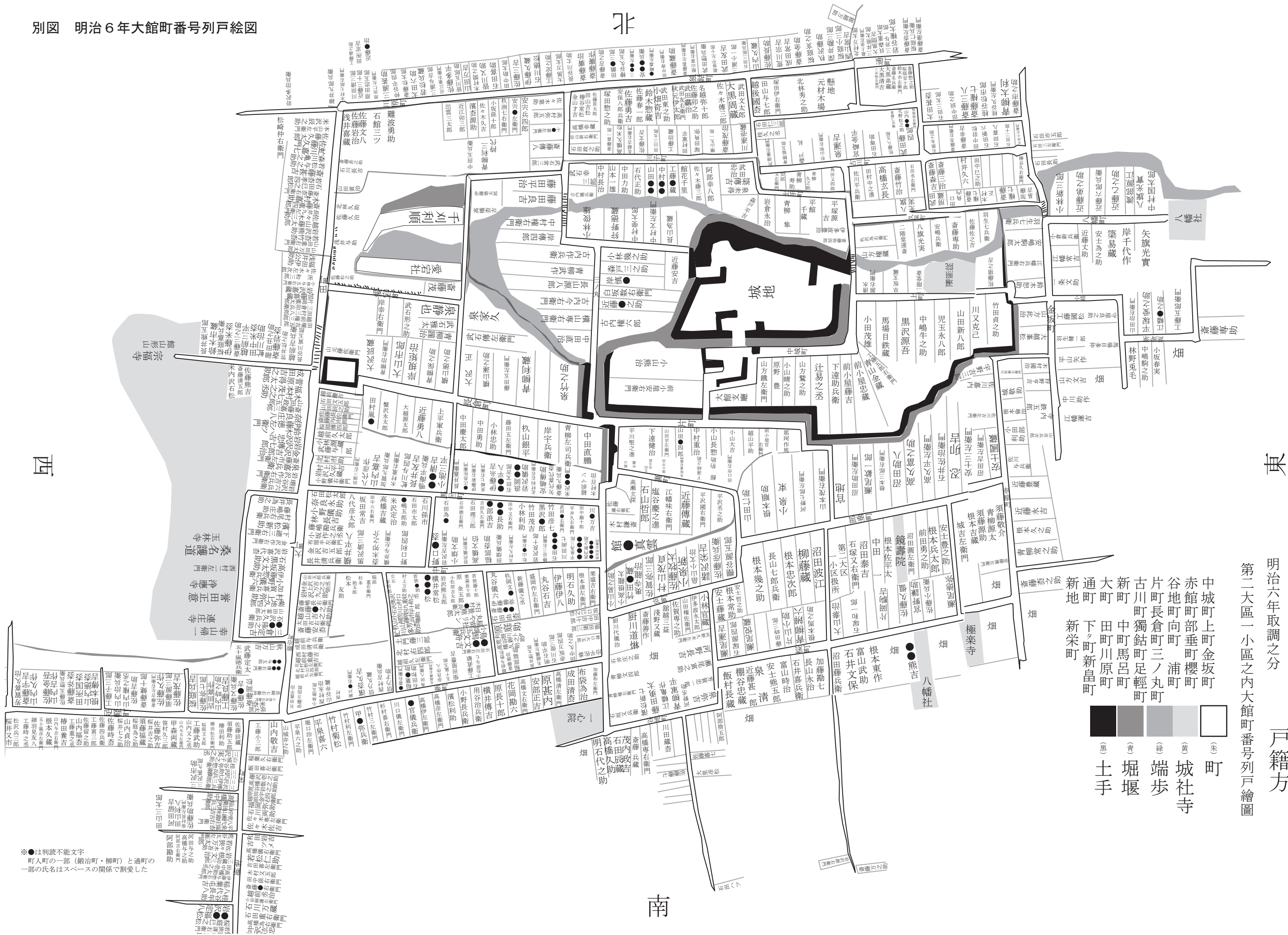
図番号	遺構・調査区	層位	種別	形態		部位	規格(mm, g)			胎土		成形・焼成の特徴	施釉・文様			製作地	年代	備考	
				器種	器形		口径	器高	底径	重量	質		色	露胎範囲	文様・絵付・釉薬				特徴
17-3	〃	上層	〃	皿		底			50	6	〃	〃		量付	内：見込・？(欠失)と2重圏線		肥前系	Vの内 (1800～1860)	
17-4	〃	〃	陶器	碗		〃			32	6	陶	〃		体下～高台	内：全面・白色長石釉 外：体上・白色長石釉		京・信楽系	18c2/2～19c	
17-5	〃	上層	土器	七厘？		体～底			94	76	土師	浅黄橙	脚・孔あり		内：体・回転ナズ、外：ケズリ		—	—	
18-1	SK1459	I	焙烙？			体				25	〃	灰白	深め		内外・回転ナズ				
21-1	SP1585	上面	陶器	壺		〃				12	陶	灰			外：にぶい黄橙色鉄釉		丹波カ	16 c	
21-2	SP1561		染付	碗	半筒形	底			44	4	磁	明灰白					肥前	Ⅱの内 (1630～1650)	
21-3	SP1565	上面	〃	〃	丸形	口～体				4	〃	〃					〃	Ⅲの内 (1650～1690)	
22-1	AO-22	攪乱	〃	小碗	〃	〃	86			10	〃	灰白			外：口～体・梅		〃	Ⅳ～Ⅴの内 (1760～1790)	
22-2	〃	I	〃	中碗	〃	〃	102			19	〃	〃			外：口～体・菊花+草？		〃	Ⅳの内 (1700～1750)	
22-3	〃	攪乱	〃	碗	—	体～底			41	29	〃	〃		量付	外：体・松+？		〃	Ⅳの内 (1725～1775)	
22-4	AN-23	I	白磁	皿	折縁形	口				3	〃	明灰白				内外貫入多	肥前	Ⅳの内 (1690～1750)	
22-5	AP-22	I	〃	小皿	稜皿	口～底	96	21	52	19	〃	〃	型打ち	量付	内：見込・丸寿字	丸寿字は陰刻、木型打ち込み皿	瀬戸	19 c ・ 2/3	登窯11期
22-6	AO-23d	Ⅱ	染付	小皿	四角形	〃	79	24	48	90	〃	〃	〃	〃	内：体・波、見込・唐人	波・唐人は陽刻、濃み掛け	〃	〃	〃
22-7	AO-22	攪乱	〃	瓶	辣圭形？	体				73	〃	〃			外：体・草花		肥前	Ⅳの内 (1690～1750)	
22-8	AP-22a	Ⅱ	〃	猪口	—	口～体	58			9	〃	〃			外：体・草		肥前(有田カ)	〃	
22-9	AP-23a	〃	陶器	碗	—	口～体				5	陶	灰黄				内外貫入多、漆継ぎ	肥前カ	Ⅳ	
22-10	AM-22	盛土	〃	中碗	杉形	口～底	92	51	44	45	〃				内：体・オリーブ色灰釉 外：口～体・オリーブ色灰釉	内外貫入多	京・信楽系	19c	外底面に墨書あり
22-11	AO-22a	Ⅱ	〃	皿か鉢	—	口～体	204			33	〃				内：口～体・オリーブ色灰釉 外：口～体・オリーブ色灰釉		肥前カ	Ⅲ～Ⅳの内 (1650～1790)	
22-12	AN-22	I	〃	搦鉢	—	底				42	〃	灰黄			内外：黒褐色鉄釉		筑前カ	19c1/3～2/3	
22-13	〃	〃	〃	壺		体～底			50	43	〃			内面	外：体・褐色鉄釉		〃	18cカ	
22-14	AO-22	攪乱	〃	壺・甕	—	体				77	〃	灰褐色	内外面格子叩き目				肥前	Ⅳ～Ⅴの内 (1700～1790)	
22-15	AM-23d	Ⅱ	〃	瓶カ		〃				45	〃	明赤褐	焼成不良		外：体・灰白色灰釉		〃	Ⅴの内 (1800～1863)	

図番号	遺構・調査区	層位	種別	形態		部位	規格(mm,g)				胎土	成形～焼成の特徴	施釉・文様			製作地	年代	備考
				器種	器形		口径	器高	底径	重量	質	色	露胎範囲	文様・絵付・釉薬	特徴			
22-16	AO-22c	〃	〃	土鍋		底			60	21	〃	にぶい 黄橙	体下～底	内：底・暗褐色鉄釉 外：体・暗褐色鉄釉		京・信楽系	18c・1/3～ 19c・2/3	
22-17	AN-23	攪乱	〃	土鍋蓋		天井～受け			164	41	〃	灰黄	受け部	内：天井・オリーズ黄灰色灰釉 外：天井・暗褐色鉄釉		〃	19c	
22-18	AO-22b		土器	七厘	目皿	－				13	土師	明灰白			被火			
22-19	AN-23	攪乱	〃	火消壺 蓋	丸形	鈕、天井～受け	260		54	157	〃				内面炭化物付着			

第15表 掲載土製品・石製品・金属製品・木製品一覧

図番号	分類	名称	調査区・遺構	層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	欠失の有無	形態	石材	備考	
15-3	C	炉壁?	SE1450	3	37	21	12	11.1					
12-2	S1-7	砥石	SI1512	攪乱	37	32	12	25.4		扁平角柱状		2面使用	
15-4	S1-6	すり石	SE1450	3～4	138	114	13	191.5	二つに折損	扁平円盤状		2点接合、2面に擦痕	
21-4	S1-7	砥石	SP1565	上面	45	29	5	6.4	欠失有り	板状	粘板岩	主1面使用、仕上げ砥	
22-20	S1-7	〃	AO-23d	II	40	20	2.5	4.0	〃	〃	細粒岩	〃	
22-21	S1-7	〃	AN-23	I	33	20	3	4.3	〃	〃	泥岩	〃	
22-22	S4	火打石	AO-22	〃	37	13	12	11.0		角礫	石英		
22-23	I	釘?	AO-22	攪乱	68	16	15	15.5		棒状			
22-24	〃	棒状鉄製品	AM-22d	II	70	12	11	7.4		〃			
22-25	〃	吸口	AO-22	攪乱	61	10	10	6.6				羅字残存	
図版11-26	〃	鉄塊系遺物		表採	99	69	43	403.0				磁着強い	
図版11-27	〃	椀形鍛冶滓		〃	85	52	58	198.1				磁着有り	
図版11-28	W	漆器	AO-22	攪乱	34	23	7	2.6				椀々	

別図 明治6年大館町番号列戸絵図



明治六年取調之分

第二大區一小區之内大館町番号列戸繪圖

戸籍方

- 町
- 城社寺
- 端歩
- 堀堰
- 土手

※●は判読不能文字
町人町の一部（鍛冶町・柳町）と通町の
一部の氏名はスペースの関係で割愛した

写真図版



発掘区全景



竪穴建物跡1511
南東より



明治6年秋田県第二大区第一小区大館町番号列戸絵図
(『大館市史 第三巻上』付図を使用)

城跡遠景

長木川北岸より



城跡三ノ丸地区近景

北より



発掘区近景（発掘前）

東より



図版4 大館周辺空中写真





大館市 2005 年撮影 1 : 10,000

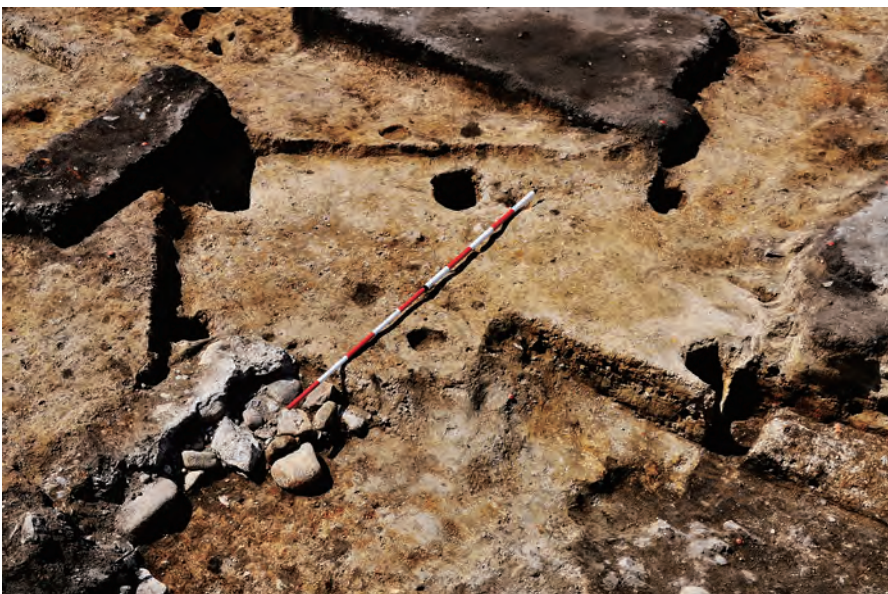
図版 5



縦穴建物跡1455土層断面
南東より



縦穴建物跡1455完掘
南東より



縦穴建物跡1510完掘
南東より



竪穴建物跡1511 調査風景 南東より



竪穴建物跡1511 遺物出土状況



竪穴建物跡1512 土層断面 南東より



竪穴建物跡1512 完掘 南西より

図版 7



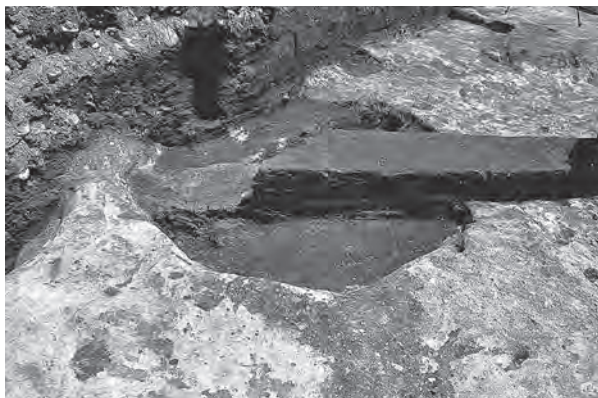
竪穴建物跡1513 完掘
南東より



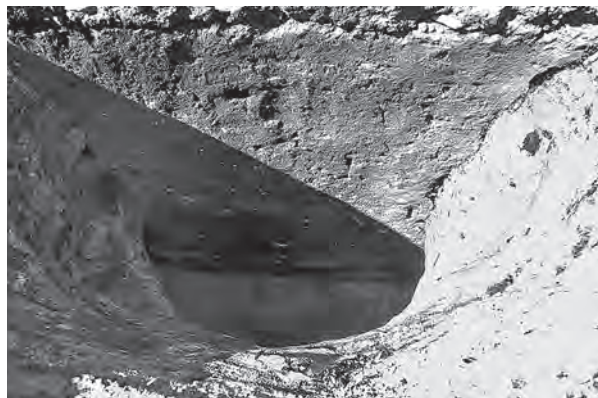
竪穴建物跡1513 土層断面
西より



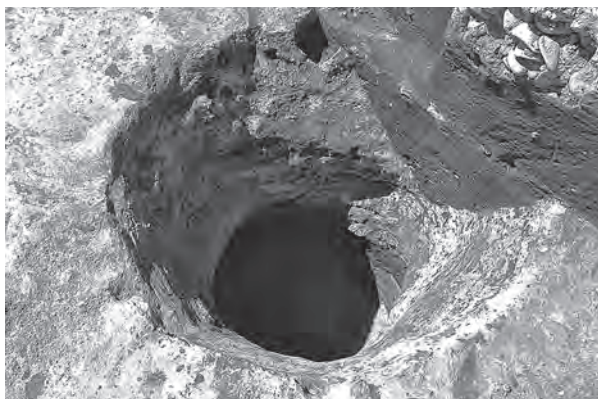
柵跡1485 完掘
南より



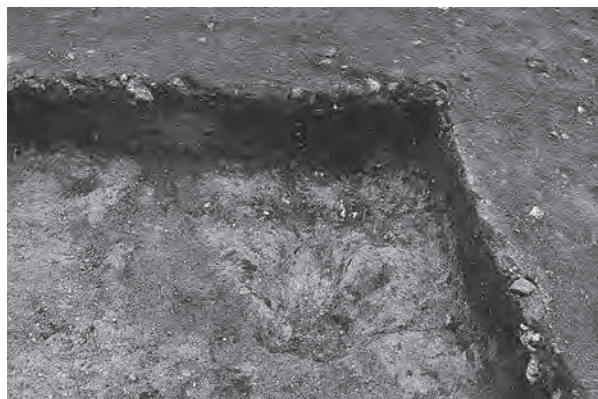
井戸跡1450 検出 南西より



井戸跡1450 土層断面 南より



井戸跡1450 完掘 南東より



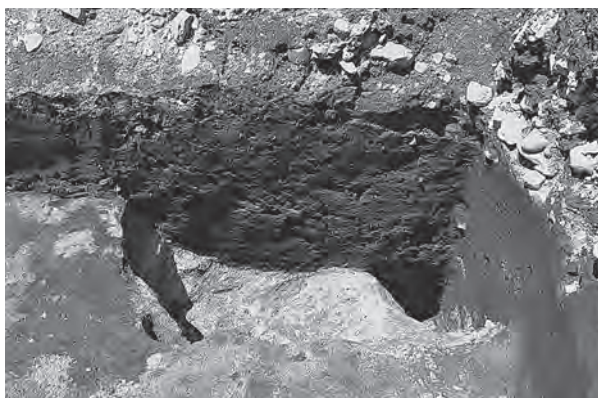
溝跡1470 完掘 北より



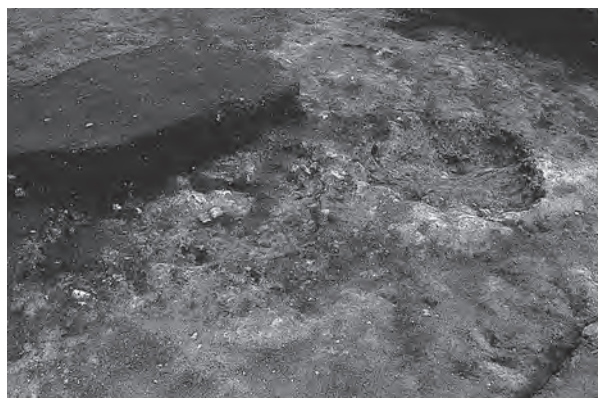
溝跡1514 完掘 南西より



土坑1451 完掘 南より

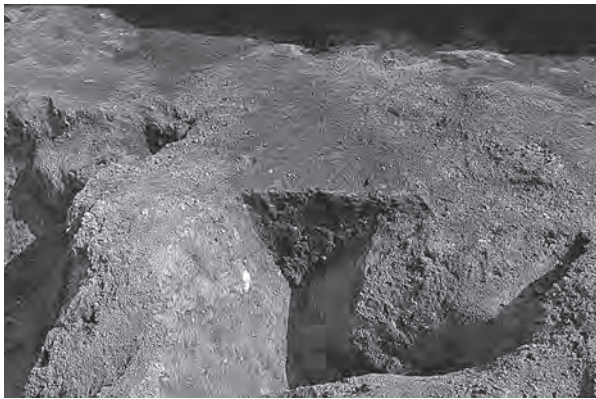


土坑1454 完掘 東より

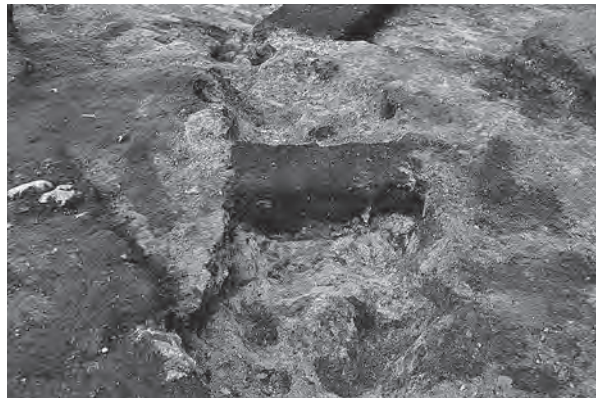


土坑1459・1460 完掘 南西より

図版 9



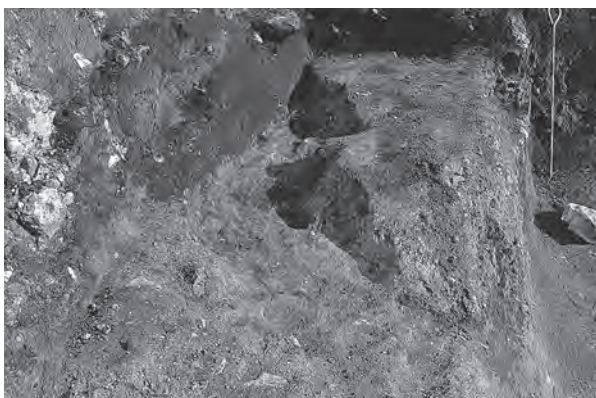
土坑1501 土層断面 北より



円形周溝1469 土層断面 南東より



円形周溝1469 完掘 南より



円形周溝1515 完掘 北より



自然流路1458 南より



1 : 2 (15-4のみ 1 : 3)

図版 11



発掘区出土遺物

1 : 2 (15・26・27は1 : 3)

報告書抄録

ふりがな	おおだてじょうあとはくつちょうさほうこくしょ（2）							
書名	大館城跡発掘調査報告書（2）							
副書名								
巻次								
シリーズ名	大館市文化財調査報告書							
シリーズ番号	21							
編著者名	嶋影壮憲							
編集機関	大館市教育委員会歴史文化課							
所在地	〒017-0012 秋田県大館市釈迦内字獅子ヶ森1番地 TEL 0186-43-7133 FAX 0186-48-2512							
発行機関	秋田県大館市教育委員会							
所在地	〒018-3595 秋田県大館市早口字上野43番地1 TEL 0186-43-7111 FAX 0186-54-6100							
発行年月日	2025年2月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ－ド 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
おおだてじょうあ 大館城跡	あきたけんおおだてしあざさんのまる 秋田県大館市字三ノ丸	05204	4-46	40° 16′ 21″	140° 33′ 43″	20240424 ～ 20240702	296	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
大館城跡	館跡	中世 江戸時代	竪穴建物跡、柵跡、井戸跡、溝跡、土坑、円形周溝、柱穴・柱穴様ピット		陶磁器、土器、石製品、金属製品		中世前期の井戸跡を検出、中世大館城の遺構群を検出、円形周溝を検出	
要約	大館城跡は大館盆地中央部に所在する。当地は長木川に面した比高約10mの段丘崖がわずかに半島状に突き出した部分、標高約70mに立地し、大館盆地北部から津軽との境の山々を一望できる。当城跡は昭和53～55年に秋田県教育委員会が実施した中世城館遺跡詳細分布調査で、遺跡として登載されたものである。今回の調査区はこのうち「三ノ丸」地区にあたる。 発掘調査は秋田県信用保証協会大館支所建設に伴うもので、その建築部分東西25m、南北約13mを調査した。この部分は城全体からみれば西側にあたる。 発掘区内では竪穴建物跡5軒、柵跡1条、井戸跡1基、土坑数基、円形周溝2基、柱穴様ピット多数が検出された。竪穴建物跡は炉跡などを伴わず、納屋等の建物と考えられる。井戸跡は竪穴建物跡と重複して存在し、建物跡に先行する。円形周溝とみられる遺構が2基確認されたが、市内では初めての発見例となる。三ノ丸地区では平成28年度に発掘調査を実施しており竪穴建物跡が検出されている。今回の発掘区とその調査区の約100mにわたって建物跡が分布していたと考えられる。 出土遺物は陶磁器類・石製品・金属製品などである。陶磁器類には中国製陶磁器（染付）、瀬戸・美濃焼（天目皿・灰釉皿・染付）、肥前陶磁器（染付・碗・壺・瓶・甕）、土師器（皿・七厘・蓋類）、京・信楽系（碗・土鍋・土鍋蓋）のほか、産地不明のものが若干ある。							

大館市文化財調査報告書第21集

大館城跡発掘調査報告書（2）

発行日	令和7年2月28日	発行
編集	大館市教育委員会歴史文化課	
	大館市釈迦内字獅子ヶ森1番地	
発行	大館市教育委員会	
	大館市早口字上野43番地1	
印刷	有限会社さとう印刷工業	
	大館市字馬喰町37番地	
